

# 遡るは時の流れ

タイムマシン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ふと、ベートは気付いた。過去に戻ってきていると。と言っても、一年ほど前にだ。原因は不明。特にするものもないので、前回と同じように行動しようとしても、他にも逆行者がいるせいか世界が何やら変化していて……？

逆行もの。

キャラ崩壊が苦手な人はブラバ推奨です。

シリアスさんは特になし。どちらかと言えばギャグ。

# 目次

遡るは時の流れ	1
ベート・ローガの憂鬱	15
第一次神会对戦	24
閑話 ベル・クラネルのある一日	35
酒場での死闘	45
第一次逆行者会議	56
組み合わせは如何に	67
とつくん!	80
酒場の少女から見た冒険者たち	89
貴様の名は。	100
事の終わりと新たな始まり	120

提案  
新たな仲間



# 遡るは時の流れ

ダンジョンの『上層』を二人の男女が走っていた。

一人は金の髪と瞳を持つ少女——【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン。もう一人は灰色の髪に琥珀色の瞳が特徴的な獣人の青年——【凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼】ベート・ローガ。

遠征帰りのため、本調子とはいかないものの、過剰戦力ともいえるLv5の二人の前にモンスターは為す術なく屠られていく。

ベートは感傷に浸りながら、体を動かしていた。

(もうすぐあの兎野郎と出くわす所か……)

この不可解な現象に巻き込まれていると自覚したのは、一年前だろうか。

——ベートには未来の知識がある。

それを聞いて信用する者など恐らく皆無と言っている。ベート本人でさえ、他者からそんな事を言われたら、まずその正気を疑うだろう。

しかし、現実としてベートは未来を知っている——いや、過去に戻ってきたと言うのが正しいか。

(つたく……どうしろってんだ)

原因は不明。ベートは過去に戻る等という大それた魔法を使用した覚えはないし、ソレらしいきつかけもなかった。加えていうなら、ベートが望んだこともない。望んで過去に戻ってきたならば、ベートは間違いなく、幼少の、家族がいた頃に戻る事を選択した筈だからだ。わざわざ「ロキ・ファミリア」に加入して少し経過した後に戻ってくる必要が無い。

故に、ベートは前回の流れをなぞることにした。遠征などで前回命を落とした者や危機に陥った者を救ったりはしたものの、流れ自体にさほど変化はない。

他にも、自分と同じ境遇の者が存在しないか探ったりもした。いちいち聞いて回るわけにもいかないもので、識別方法は単純。前回と違った事態になっている所を探せばいい。

この一年で判明した明確に異なる点はいくつかあるが、元をたどれば「アストレア・ファミリア」の存続、これが原因だろう。

ベートの記憶では、「アストレア・ファミリア」というファミリアはオラリオ暗黒期に壊滅している。その生き残りである「疾風」が闇派閥を軒並み潰し、オラリオ暗黒期の終幕となった筈だ。

しかし、今回はそもそも「アストレア・ファミリア」が存続している。彼女たちが治安維持活動を続けていた結果、その余波を受けて前回と変わった世界になっているのだ

ろう。

では、何故「アストレア・ファミリア」が存続しているのか。この原因を探すのはなかなか骨が折れる。

何せ、彼女たちは絶大な支持を集めていたのだ。話に聞いた通りなら、今回はダンジョン内で「ルドラ・ファミリア」に罠にかけられた事が原因だとされている。それさえ理解しているならば、後は簡単。闇派閥が動き出す前に捕まえる、それだけだ。

そして、それは誰かが助言するだけでいい。『危険だから直ぐに取り締まった方がいい』と。

だから、同じ境遇の者が見つげにくい。彼女たちと親しい者、単に平和を求める者、または彼女たち自身。容疑者が多すぎるのだ。

「こんな割に合わねえ事誰がするかよ」

そう吐き捨ててベートは探すのを止めた。元の世界に戻る手段も何もかもが不明な以上、そんな下らないことを調べるほどベートは暇ではなかった。戻れるに越したことはないが、戻れなくても別にいい。それがベートの判断だった。

前回よりも今回の方が遥かに良い世界へと変化している。ならばベートから積極的に行動を起こすことはない。

閑話休題

『ヴオオオオ……!!』

「向こうか……」

『ミノタウロス』の雄叫びを聞き届けたベートが風を切つて進む。

この場でベートがすることは何もない。アイズより遅れて到着するだけでいい。そうすれば後に世界最速兎となるトマト野郎が出来る。

そう考えながら、怪物の居る通路に出たベートの目の前には、何故か抜刀していないアイズと、何故かトマト状態になつていないベル、そして、『ミノタウロス』の魔石を手にかけているもう一人の女がいた。

状況を把握しようとベートがアイズに声をかける。

「おい、アイズ。何があつた？」

「あの人が『ミノタウロス』を倒しちゃつた……」

「ああ？　なんだよ、これも余波か……？」

アイズが指す『あの人』は自分たちの正面でベルに向き合っている少女——【疾風】リユー・リオン。今の自分たちと同じLv5。第一級冒険者である。

「無事ですか？　ベル」



「は、はい！ あ、あの！ ありがとうございます！ ……あれ、僕の名前って……」

「……………疲れたでしょう。地上まで送ります」

「でも……」

「……………」

「あつ、はい」

リユートの有無を言わさぬ圧力にベルが顔を赤らめながら頷く。ベルの様子を見る限りでは初対面の様だが、何故か向こうはベルの名前を知っている。

そんな二人を見て、アイズが一步前に出た。

「あの、危ない思いをさせてごめんなさい。リオンさんもありがとうございます」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「……………」

アイズは会話に若干の違和感を覚えたものの、気のせいだろうと首を振るった。

リユートとベルが横を通過する。何故かベルの手を繋いでいるが、深くは考えなかった。【疾風】は他人との接触を好まないという話は間違いだっただのか、と。

真つ赤になっているベルに負けず劣らず、耳まで赤くなったりリユートが何故かアイズを見て、そしてベルを見て顔をほころばせたが、そんな事もあるのだろうと思つて。

最後に、リユートとベートの視線が交差した。



(おかしい……絶対あの女怪しい)

『豊穰の女主人』にやって来たベートはウェイトレスをしているリユーをじっと見た。遠征帰りの打ち上げを『豊穰の女主人』で行うと主神ロキが宣言したため、渡りに船だとベートも参加した。

どういう訳か、ここは「アストレア・ファミリア」の構成員メンバーが偶に仕事を手伝いに来ている。勿論、リユーもその一人であった。

ベートとリユーに接点らしい接点はない。お互いにファミリアの幹部のような立ち位置にいる分、顔と名前、人となりは覚えているが口が悪く、粗暴だと知られているベートと高潔なエルフであるリユーでは、相性が悪い事くらい誰が見ても明らかだったからだ。

そう、高潔であれば。

「ベル、美味しいですか？」

「はい！　すごく美味しいです！」

「ふふっ、まだまだありますからね」

(おい、これどうすんだ)

——完全に恋に落ちていた。高潔さなど彼方へ放り投げて恋する少女に変貌している。

リユーとベルが隙間なくくつついている。他のウエイトレスも何事かと手を止めるほどだ。そのうち『あーん』でもしそうな勢いである。

ベルもご飯よりもどこに視線が向かっているのかを考えれば、彼の気持ちを押し量れるというもの。

「ベートさん、まずはご一献！」

「メシ食いましよーよ！」

「ベートさん、こつちにもあるツスよ！」

「うるせえぞテメーら！ ちよつと向こう行つとけ!!」

目の前に出された酒を乱暴に煽り、怒声を浴びせる。それでも全く怯まないファミリアの面々を見て、ベートは大きく舌打ちした。

(こつちも面倒な事になりやがって……!)

ここに居るのはベートに命を救われた者たちだ。それ以来何かとつけてベートと行動を共にしようとする者が増えた。要は前回より打ち解けるのが若干早かったという事だ。まあ、以前と変わらずエルフを筆頭にした大部分に悪い印象を持たれているが。

(そんで、ここからどうすんだ?)

横で騒ぐ少年少女を視界から排除し、思考する。

もはや、こうなつてしまつては前回の跡をたどることは不可能だろう。本来なら、ここでベートはベルのことを『弱者』として貶す役割を担つていた。それでこそ、『強者』に、世界の摂理に歯向かおうとベルは立ち上がるのだ。

決して口には出さないが、ベートはベルを高く評価していた。

彼が初めてだったのだ。『弱者の咆哮』を上げて、ベートに魅せてみせた人間は。

しかし、今回はそれが出来ない。己のファミリアの不始末を他派閥に尻拭いさせた挙句、その被害者を貶すなど、いくらベートでもする気にはなれない。まして、酔つていなければ尚更だ。

では、このまま放つておいて、ベルは強くなるのか。それに対してベートは否——とは答えない。何せベルは一月足らずでランクアップする少年だ。冒険者としての資質は十分ある、それがベートの認識だ。あと彼に必要なのは、きっかけと彼を導く師の存在。それをリユーが用意できるのか。

別段、ベルが強くなつてもベートに何か得がある訳でもない。極論、ベルが冒険者を止めたとしても何の問題もないのだ。

しかし、そう割り切れるものでもない。ベートは知っているのだ。ベル・クラネルという少年の輝きを。だから気に食わない、それだけだ。

そんな時、ベートが思慮に思慮を重ねている最中、二人の会話を優れた五感を持つベートが拾った。

「えっ!?! リューさんってあの!?!」

「はい、よろしければ手ほどきしましょうか?」

「いいんですか? 他派閥にそんなことして……」

「ベルなら問題ないでしょう。アストレア様にも許可は貰ってます」

「あ、ありがとうございます!」

「では、明日から。頑張りましょうね」

はい! と元氣よく返事をするベルの頭に兎の耳をベートは幻視した。

どうやら杞憂だったらしい。熟考していたのが馬鹿みたいだ。

リユースの師としての実力などベートに知る由もないが、アイスよりはマシだろう。それくらいは理解できる。

詳しくは知らないが、前回は『戦争遊戯』ウォーゲームの時にアイスとテイオナがベルの指導を行っていた筈だ。あの二人は隠しているつもりだったのかもしれないが、アレを見抜けていない者はあの場にはいなかっただろう。

くだらねえ、そう呟いてベートは夜風に当たろうと店の出口へ向かった。どうやらここでもベートの出番はないらしい。



「——待ちなさい。」ヴァナルガンド【凶 狼】

店を出たベートの背後から、涼しげな声が聞こえた。振り返ると、そこには緑を基調としたウェイトレスの服を着たりューがいた。どうやらいつもの自分を思い出したようだ。先程の少女の面影はなくなっていた。

「ああ？　なんだよ」

「貴方も同じですか？」

「——やっぱリテメーか」

半ば確信していることだったが、やはり、正解だったらしい。改めてリューに向き合  
うと、ベートが口を開いた。

「お前は何か知ってるのか」

「いえ、私も気付けば戻っていました。だから過去を——いま現在を変えました」

そう口にするリューの瞳には、若干の後悔の色が見られたが、それ以上に安堵や喜びの感情が表れていた。

「じゃあ、お前は他にこの現象に巻き込まれてるやつを知ってるか？」

「はい。貴方もよく知る人のはずです」

「……どういう事だ。まさか俺らのファミリアにまだいるってか？」

「そう言ったつもりですが」

知らないんですか、と言外に告げられてベートは停止した。

他に逆行した者がいる？ 誰が？

動揺を表に出さないように注意しながら、再び尋ねる。

「誰だそいつは。いつから知っていた」

「私が出会ったのは丁度、貴方たちが遠征に向かう前でしようか。酷く動揺していたので、声をかけたら話を聞かされました。内密にして欲しいとの事だったので、誰かまでは伏せますが」

「チツ、まあいい。じゃあ、最後だ。テメーは何がしてえんだ。どうして兎野郎を助けた」

「どうして、ですか……」

リユーが口ごもる。今のベートの複雑な感情がこもった瞳に射抜かれ、嘘をつくのは憚られた。だから、リユーは自身の気持ちを正直に話すことにした。

「私は、彼に救われました。彼が私を闇から光の射す方へ導いてくれたのです」

「……」

「それからでしょうか。彼を想うと胸が苦しくなったのです。そして、思った。これが恋だと」

「……ああ？」

「アリーゼたちにも相談しました。それで、行動を起こした。誰かに取られる前に、私が彼を——」

「——おい何やってんだ」

思わずベートは頭を抱えた。それだけの理由でベルを助けたのか、と。

やはり、いつの間にか前回の「疾風」はどこかへ行ってしまったらしい。高潔、貞淑で知られているエルフとは思えないほどだ。今もリユーは顔を赤らめながら、モジモジしている。テメーはそんな奴じゃなかっただろうが、と叫びたい気分だ。

「——【疾風】」

「はい」

「お前の言ってる奴はアイズじゃねえんだな」

「……はい、違います」

「……そうかよ」

それだけ確認して、ベートは店に戻った。見事にベルの師のポジションを奪われたアイズであるが、考えてみればそれも良い事だと思える。



何かと勘違いするフアミリア馬鹿ソネスの者がいるが、ベートは別にアイズに惚れ込んでいては無い。ただ、飽くことなく強さを求め続ける彼女が、自分の求める理想だけだ。

それを踏まえると、ベルとの接触がなくなるのはある意味ベートの求める展開だ。これ以上、心を許せる者を増やしても彼女が立ち止まる危険を増やすだけに思えた。

そして、自分の座っていた場所に戻ろうとした時、

「ア、アイズたん？　ちよつと待って無理死ぬ死ぬ!!」

ロキの悲鳴が聞こえた。

横を見れば、アイズがロキの首を締めにかかっている。

「アイズさん！　ロキが死んじやいますよ!!　相変わらずお酒は弱いんですね……」

「ちよつとアイズ、何してんの!？」

レフィーヤやテイオネたちも騒ぎ出した。アイズの目は焦点が合っておらず、手元からは酒の匂いのしたジョッキが空になって置いてある。

「つたくよオ、何やってんだよアイズ」

「ベルが……私のベルが……」

「ベル？　あの兎野郎がなんだよ。……………ん？」

アイズが勢いよくベートを見つめてくる。信じられないものを見たような目付きだ。

ベートも気付いた。何かがおかしい、と。

(なんでアイズが兎野郎のこと知ってるんだ?)

今回は助けた相手が違う。接点はない筈だ。では、どうして。

そこまで考えて、思い至った。

(おいおい、まさか……)

「ベートさん、どうしてベルのことを知ってるの?」

すっかり酔いの醒めた目で、掴みかかるような体勢でベートに迫る。

(お前アイズも戻ってきたのかよオオ!!)

## ベート・ローガの憂鬱

「ベートさん、見てください」

「……何度目だこの記事見るの」

「もつと、よく見てください」

「見たつつてんだろぅが！」

たまらずベートが叫ぶ。アイズが手に持っているのは、一枚の張り紙。

——所要期間、一ヶ月

——ベル・クラネル、Lv2到達

「それで、今回はどうやってランクアップしたんだ？」

「前と同じ、ミノタウロスを撃破したらしいです」

つくづく縁がある奴だ、と口には出さず、内心思う。

今回はベルが『ミノタウロス』と戦うのがベートたちの遠征開始日ではなかった。おかげさまで遠征は滞りなく進んだ。前回と変わらずイレギュラ——イウィルス闇派閥イウィルスによって

宝玉を埋め込まれたモンスターとの戦闘——はあったものの、何名かは二回目となる戦いだ。苦戦は強いられたが、犠牲を出すことなく勝利し、先にランクアップしたアイズ

以外のLv5だった眷属も無事ランクアップした。

張り紙に載っている精微なベルの似顔絵を見て、アイズの顔が心なしか緩む。ベートはそれが気に食わなかったのか、少々の苛立ちを孕ませ、口を開いた。

「まあ良かったじゃねえか、アイズ。お前がいなくても兎野郎は強くなつてんだからよ」  
「良くないっ……です」

先程とは打って変わって、アイズが不満げな表情を見せる。

「ベルがランクアップしたのが、前より遅い。私が教えた方が、ベルのためになります  
……！」

「はあ？ せいぜい一週間だろ、大差ねえよ」

「あります……！」

ベートが呆れたとばかりに、大きく息を吐く。

アイズはどうやら、その数日の遅れが気に入らないらしい。本来、ランクアップ——器の昇華——には、多大な時間を要する。今までの最短記録であったアイズのランクアップでも一年。そう考えると、数日の差など誤差の範囲だとベートは思っていた。

「あの人もベートさんと同じことを言った……。ベートさんはどっちの味方ですか……！」

「——ちよつと待てアイズ」

「は、い？」

「お前、まさか言いに行つたのか……？」

掠れた声でベートが尋ねる。今、彼女が聞き捨てならない事を口走つた気がした。

あの人も同じことを言つた？ あの人？ アノヒト？

もしかしなくても、それが「疾風」だと理解してしまつたベートは、嘘であつて欲しいと希望を込めた瞳でアイズを見つめる。

このままでは、またこの二人のくだらない諍いに巻き込まれてしまうのだ。そんなもの御免こうむりたい。

しかし、現実はいつても非情で、

「もちろん……」

アイズは、やつてやつたとばかりに、手を小さく握り締めていた。見事なドヤ顔である。子供じみた自尊心が満たされているのが手に取るように分かつた。巻き添え確定、ベートはガツクリと肩を落とした。

なお、そんな間にも、ベルはリユーに連れられて「アストレア・ファミリア」のホールに入り浸り、外堀を埋められている。勿論、ヘステイアも籠絡済みである。【策士】リユー・リオンは抜かりない。

ヘファイストスの館を追い出された後、ジャガ丸くんを、宿を、「アストレア・ファミ

リア」との繋がりをリユーに与えられたヘスティアである。既にリユーを信頼している。前回のアイズとは違うのだ。

(どうする……!?!? こんな時、フィンなら、ジジイなら、ババアならどうする……!?!?)

そんな現状をアイズは全く知らない。脳をフル回転させ、自分の被害を限りなく減らそうとする。こんなどうでもいいような出来事で、先達たちの偉大さを思い知ることになるとは露にも思わなかった。今度からは、フィンたちになるべく反抗しないようにしようとしてとべートは心に誓った。

そして、偉大な団長たちの背から解決策を授かり、べートは、「俺はどつちの味方でもねえよ。それはテメーの力だけで勝ち取る問題だろうが」

そう言葉を残して、颯爽と部屋を後にした。べートはフィンの中から学んだのだ。大局を見た。少しの犠牲には目を瞑った。失うのはアイズの好感度、得るのは自身の平穩。『民衆の英雄』であり、『異端の英雄』ではなかった、『奸雄』としてのフィンの判断を参考にした。

この後に待つもう一つの試練を前に、体力を使い切る訳には行かないのだ。しかし、それも今のべートには乗り切れる気がした。ガレスのように大胆に、それでいて、リヴェリアのように冷静に対処すれば道はあると信じて。



「なるほど……助かりました【凶狼】」

ヴァナルガンド

「ああ、じゃあな」

「——いえ、まだ待つてください」

「待たねえ。後のことは全部テメーの仲間に頼れ。俺とお前は赤の他人だろうが」

ぶつきらぼうにベートが言う。ギルドに向かう途中でリユーに捕捉されたベートは、そのまま『豊穡の女主人』に足を運んだ。

リユーとベートは一週間に一度ほど、顔を合わせて情報交換を行っている。するのは前回の世界で身近に起こった事件の共有だ。

世界が変化しているとはいっても、どうやら食人花やレヴィスなどの脅威は消えてなかった。案外、そういった悪も無くなっているかと考えていたが、そこまで都合はよくないようだ。

「まだもう少しだけ……」

情報交換も終わった事で、さっさと目的を果たそうとするベートをリユーが引き止める。普段のベートなら、こんな事を気にも止めず背を向けて歩き出しているが、そういう訳にもいかない。

以前、ベートはリユウの相談をガン無視して、ろくに話も聞かなかったことがあった。その結果、待っていたのはリユウの暴走。そして、それを知ったアイズの暴走である。荒れるアイズ。黄昏の館に乗り込んでくる【アストレア・ファミリア】。地獄を見たベートは二人に協力することになった。

椅子に座り直したベートが舌打ちをして、口を開いた。

「チツ、なんだよ」

「ベルの事なんですが」

「そんな事は分かかってんだよ！ その先を言え、先を」

「ランクアップしたので、彼にプレゼントをしようかと思っただけですが、同性の貴方から何か案をと……」

「知るか！ そんなのテーマで考えろ!!」

「……む。では、料理の試食を——」

「帰る」

座り直したのもつかの間、すぐさまベートは逃走を計った。

——女性の手作り料理。それは男のロマンである。ベートとしては、大層なものとは思わないものの、一般的にソレは好まれる傾向にある。おそらくベルもその類いに入っているだろう。



しかし、それは『美味しい』が前提である。中には、美味しくなくても愛があればOKという意見もあるが、当然ながらベートとリユーの間に愛も恋も存在しない。お互いに逆行者として奇妙な関係を築いてはいるものの、所詮そこ止まりである。友達ですらないのだ。

では、リユーの料理はどうなのか。

——余談ではあるが、『ロキ・ファミリア』の女性は料理上手な者が多い。料理を作ることは少ないが、リヴェリアもレフイーヤもファミリア内では結構な腕前である。そんなファミリアで暮らしているベートが『エルフは料理が上手い』と先入観を抱いてしまふのは無理のない話だった。

だから、リユーの料理をベートは食べたのだ。その時の衝撃といたら、筆舌に尽くし難い——とまでは言わないが、決して美味ではなかった。当然、ベートはその料理に對して散々な評価を下した。

曰く、今まで食べたエルフの料理の中で最低クラス。

曰く、戦闘以外に興味を示していなかったアイズと同レベル。

並の女性なら泣いて文句を言う所であるが、リユーは挫けなかった。その後も修練を重ね、徐々に成長していた。そして、練習量に比例して、微妙な味の料理が量産されている。今回の試食というのも、それを食べるのだろう。

「逃がしやしないよ、小僧」

「なっ——」

しかし、店の出口には『豊穰の女主人』の店長、ミア・グランド。歴戦の猛者の王氣<sup>オーラ</sup>を放つ強者が、ベートの逃走経路を塞いだ。

他にも複数のウェイトレスがミアの後ろに追従し、犠牲者<sup>なかま</sup>を作ろうとしている。

「こつちは、そのポンコツエルフ作の料理を食べなきゃいけないんだよ」

「人手は多いに越したことがないニヤ！」

「なんで俺なんだよ！ こいつのファミリアを呼びやがれ！」

「アリーゼたちは既に……。それと、私はポ、ポンコツではない。訂正してもらいます」

「どうやら『アストレア・ファミリア』の眷属は既に被害者の立場にあるらしい。彼女たちとも大した縁はないが、何故か仲間意識を感じた。

「クソが……！」

力なくベートが呟く。どちらかに肩入れしてはいけず、どちらにも反応しないことも許されない。これは、二人に平等に接し、情報交換の架け橋となつているダブルスパイベート君の避けられない試練である。

もはやこれまで。運ばれてきた大量の料理を前に、確かにベートは戦慄した。そして、ファミリアの先達のことを思い浮かべながら——一気に料理をかき込んだ。

そのまま料理を平らげたベートは口数も少なげに店を後にし、誓った。

（——しばらくはギルドと店の通りには近寄らねえ）

まだ時間は昼過ぎといったところだが、今日の夕餉を食べることはないだろうと思えた。というか、食べる気がしなかった。口に何も入れたくはなかった。

——しかし、まだベートは知らない。館に帰るとアイズが料理の練習をしていて、その味見役になることを。そして、その影響で、次の日に寝込むことになることを。

## 第一次神会对戦

デネットゥス  
神会。それは神々が情報交換を行う場。

しかし、神はそんな事に興味はない。彼らの関心ごとは――

「じゃあ、次はお待ちかねの――命名式や」

「よっ！ 待つてました！」

「このために今日は来たんだからよー」

「お前ら、頼むからじつとしてくれよ!? 今回は俺の子が居るんだ！」

「なあに、俺たちに任せとけ。お前の眷属は――カツコイイ二つ名付けてやらねえとなア！」

「チクシヨオオオオオ!!」

司会のロキの言葉を皮切りに、神々が悲喜交々の声を上げる。このバカ騒ぎこそが神々の真骨頂。退屈を嫌う本性があらわになる、その瞬間。

（これが、神会ツ……!）

そんな彼らを見て、ヘスティアが小さく呻いた。この会合に参加するための条件は、眷属がランクアップした経験があることである。故に、眷属が初めてランクアップした

ヘステイアは、当然ながら、初参加である。

(大丈夫、無難な二つ名を取ってきてやるぜ、ベル君！)

ヘステイアが内心、そう決意している最中も会議は続く。ロキやフレイヤ、アストレアといった実力のある派閥はこの会議でも多大な影響力を有し、基本的には主神が望んだ、または無難な二つ名が付きやすい。

しかし、

「決まりやな！ アンタのこのカーラの二つ名は——ダークネススマイリング【暗黒微笑】や！」

「Fooooooooooooo!!」

「ウソだろオオオオオ!! 早まるな、考え直してくれエエエ!!」

(これが、地獄か……)

このように、大派閥ではない、所謂弱小ファミリアでランクアップした者が現れると、神々の格好の餌食となる。

神は他派閥の眷属にイタイ二つ名を与えることで、日々のストレスや退屈をしのぎ、冒険者たちは神の独創的すぎる命名センスに感嘆の声をもらす。まさに win-win の関係である。二つ名を付けられた眷属の主神以外は、だが。

倒れ込んだ男神を見て、ヘステイアは合掌した。ヘファイストスの話によると、再びランクアップした際に、二つ名が変更になることがあるそうなので、その時まで頑張っ

てくれたまえと無責任なエールを贈る。ヘステイアも明日は我が身——というより、次は我が身である。他のことに気を取られている場合ではなかった。

「次は——ドチビのこのちんちくりんか」

ロキがそう口にした瞬間に、一斉に視線が集まる。視線を一身に引き受けたヘステイアは最後の抵抗とばかりに、大きく胸を張った。

◇◇

(あんのドチビ調子乗りやがってえ……！)

自身の双丘を大きく主張しているヘステイアを見て、ロキが毒突く。

抜かれることはないとタカをくくっていたアイズの記録を軽々と更新されたのだ。よりにもよって、犬猿の仲であるヘステイアに。

隠蔽や工作などを行っていたならば、まだ理解できるのだが、

「ドチビ、ほんまに反則使<sup>チート</sup>ってないんやろうな」

「つ、使ったわけないだろ！ ベル君はちゃんと自分の力でここまで来たんだ！」

犬猿の仲とは言ったものの、ロキもヘステイアの人となりは十分理解している。その彼女が言うのであれば、ベル某は本当に一月ほどでランクアップしたのだろう。

ならば、ロキに残されたヘステイアへの嫌がらせの手段はイタい二つ名を与えることだけなのだが……。

(……あかん！ そんなんした日にはウチがアイズさんに殺される！)

アイズに対する恐怖でその考えを振り払う。なんでこんなことになったんや、とロキは思わずにはいられなかった。

▶▶

時は神会の前日まで遡る。次の日に始まる神会に思いを馳せているロキのもとに、二人の眷属が訪れた。

「おー、なんやアイズたんとベートか。急にどないしたん？」

「俺は付き添いだ。何でも、アイズが言いたいことがあるんだとよ」

ほとほと嫌そうな顔をしているベートに対して、アイズの表情は真剣そのものだ。部屋に入ってきた二人に椅子を用意し、ロキ自身もベッドに腰掛ける。深刻な面持ちのアイズを見て、どんな話だとロキも身構える。

「あの、ベルがランクアップしたから、ちゃんとした二つ名を付けてあげて欲しくて」

「ベルう？ ウチのファミリアにはそんな名前の奴おらんかったはずやけど」

「ちげーよ、アイズが言ってるのは他派閥の冒険者のことだ」

「ヘステイア様の眷属で……」

「ヘステイアやと!? あのドチビのどこの子がランクアップしたんか！」

衝撃のあまり、ひっくり返りそうになるのをなんとかこらえる。

出来立てホヤホヤの弱小ファミリアから、ランクアップした者が現れたとなれば、神々の大きな関心を引くだろう。

しかし、今のロキにはそんなことよりも気になることがあった。

「で、アイズたん。ドチビの眷属とどういう仲やねん。まさか、男か!? 恋とか言わんよな!」

「そんなこと……」

「いや、どんなこと!? 答えになってないやろー!」

ロキの怒涛の質問ラツシュにアイズがおののく。答えに窮したアイズはベートの方をチラリと見た。代わりに答えてと言わんばかりのアイズに、ベートは若干イラツとしながらも答える。

「遠征帰りに兎野郎に迷惑がかかったから、その罪滅ぼしに何かしたいってコイツが言い出したんだよ」

「なるほどなるほど。じゃあイタイ二つ名を付けたら……」

「斬ります」

「——分かりました」

ロキは思わず敬語で答えた。





(ちゃんとしたのってどんなんや……？ 無難なやつならセーフか)

あの時のアイズは、変な二つ名であれば容赦しないと、金の瞳が雄弁に語っていた。あの後、ベートに泣きついて二つ名を一緒に考えてもらった。勿論、フィンたちも呼んで大ごとで発展したが、ロキとベートの安全がかかっているのだ。睡眠時間は大幅に削られたが、いくつが無難な案が思い浮かんだ。

「案がある奴はどんどん言ってみてな」

司会としての仕事をこなしした後、再び思考に時を費やす。

ロキとヘスティアの仲は神々の間では割と有名な話である。そのロキが先陣を切らなかつたことに疑問を浮かべつつも、神は思い思いの案を述べていく。

(さてと、ここからどうやって場を誘導するか……)

ロキはこの大喜利大会のような会議を、どうにか無難な命名式に戻す必要がある。しかし、彼女はヘスティアのために下手に出るなどゴメンである。そこで、司会の立場を存分に利用して、場の意見を纏める感じで無難な二つ名を付けることを画策した。

「そや、ドチビ。自分なんかいい案ないんか？」

「えっ！ 良いのかいロキ！」

「ドチビの子で最後やし、ウチらも疲れてんねん。聞くだけ聞いたる」

ヘスティアが歓喜に満ちた表情を浮かべる。ヘファイストス等の親交がある神には、

無難な二つ名のために協力を要請しているが、まさかロキからこんなチャンスを振られるとは思っていなかった。

「じゃあ、無難なやつで！」「リトル・ルーキー」とか「白鬼」とかそんな感じの！」

「エラく普通やけど……まあ、別にいいか。皆もええよな」

よく言つたとロキが内心拍手する。

ロキもヘステイアがイタい名前より、無難なものの方を求めていることくらいは理解している。敢えてヘステイアに発言権を与え、その案を採用しようという魂胆だ。

このロキの行動に違和感を覚える者がいようとも、それを口に出す者はいない。鬼気迫った顔をしたロキに、そんな指摘をしようものなら後で何をされるか分からないのだ。自分から最大派閥に喧嘩を売るような真似をする神は——

「あら、どうしたのロキ？ あなたらしくもない」

居た。「ロキ・ファミリア」と最大派閥の名を争っている、世界最高位の階位レベルの眷属を有す「フレイヤ・ファミリア」。その主神たるフレイヤは当然のように発言した。

「なんや、フレイヤ。じゃあ自分になんかい案があるんか？」

「いいえ。でも、無難というのは少し物足りなくないかしら。少しばかり刺激が欲しいわ」

(この色ボケ女神イ……)

ロキの顔が盛大に歪む。せっかくまとまりつつあった場が、フレイヤの一声で再びざわつき始めた。単身ロキに齒向かうのは誰もが遠慮するところだが、フレイヤという後ろ盾があれば話は別だ。刹那のスリルを求めて、我先にと案を出していく。

この時点で、会議の勢力は三つに別れた。一つ目はロキについた、無難な二つ名を良しとするグループ。二つ目はフレイヤについた、それを良しとしないグループ。そして、三つ目が対立する神々を見て、中立の立場をとったグループだ。ヘルメスなんかは真つ先に中立の立場をとり、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

(あと誰か、こっちにつくやつがいたら……！)

場は均衡状態を保っていた。中立派からどちらかのグループに属することがあれば、それでこの勝負は決着がつくだろう。負けたらどうなるか分からない以上、ロキとしてはこの際ヘルメスでもいいから味方して欲しいくらいだった。

すると、そこに、

「——少し、いいでしょうか」

中立を保っていた一柱の女神が手を挙げた。下界の子のみならず、神すらも魅了する美貌を持つフレイヤとは違ったタイプの美人。凛とした雰囲気纏った『正義』を司る女神——アストレアが戦いに参戦した。

「アストレアにも面白いとくわ。無難なものか変なもの、どっちがいいと思う？」

先手必勝。ロキがアストレアに尋ねる。お前はどっちの味方だと。「アストレア・ファミリア」は人数こそ多くないものの、第一級冒険者が複数名在籍している力ある派閥である。ロキもフレイヤも一目置いている彼女に勝敗は委ねられた。

アストレアはやや困ったような顔を浮かべながらも、やがて口を開いた。

「そうですね……。私は無難なものではなくても良いと思います」

「えっ!? そんな……」

ヘステイアが泣きそうになる。ロキもヘステイアと同じ思いだ。彼女は今、こちら側にはつかないと宣言したのだ。

しかし、アストレアは「でも」と話を続けて、

「変な二つ名を付けてしまうのは、ベルがかわいそうです。フレイヤ、貴方も分かってくれますね?」

フレイヤに向き直して、そう言った。フレイヤも別にベルにイタい二つ名が付いて欲しい訳では無い。ロキにちよっかいを出した後は、それらしいものに誘導するつもりだったのだ。特にアストレアの発言を訂正することもないので、素直に頷く。

「アストレア、あなたはこの子の二つ名の案を持つているの?」

「はい。話に聞いた所によると、ベルは非常に純粋で夢見る少年のようです。そうですね、ヘステイア」

「う、うん」

「ならば、彼はカツコイイ二つ名を求めていることでしょう」

物語の英雄のような、そうアストレアは付け加えた。

神が皆一様に考え込む。そんな二つ名を与えたのは何年前だったのだろうか、と。

「英雄ねえ……偶にはそういうのもいいか」

「おーい、ヘステイアー。こいつの特徴ないのかよ。戦闘スタイルとか、そんな感じの」

「うーん……」

寄せられたいくつかの質問に悩む。当初予定していた流れとはだいぶ異なっているが、このままなら酷いことにはならなそうだとヘステイアーも安堵した。

そして、ヘステイアーが素直に質問に答えようとすると、

「ベルは武器にナイフを用品ます。彼は速さに特化して一撃<sup>ヒットアンドアウェイ</sup>離脱の戦法らしいですよ」

「アストレア、キミ詳しく過ぎないかい!?　そこまでボク教えてないよね!」

何故かアストレアが答えた。思わずヘステイアーも突っ込む。アストレアは意味深な笑みを浮かべている。

「それで、私の案でしたね——」

結局、彼女の意見が採用された。



「あ、神様！ おかえりなさい」

「ただいま、ベル君」

神会でヘトヘトになったヘスティアをベルが迎え入れた。ホームである廃教会は未だに二人きりの空間であり、閑散としている。

「か、神様っ。僕の二つ名決まったんですよね！」

「うん、決まったよ」

ベルの顔が分かりやすいほど明るくなる。何かと彼の周囲は大変なことになっているが、当の本人は英雄に憧れる少年である。純粹なのだ。

「それで、何になったんですかっ」

待ちきれないとばかりに、ヘスティアの傍にベルが近寄る。ヘスティアは苦笑しつつも、決定したベルだけの二つ名を告げた。

「ベル君の二つ名は——【アキレウス韋駄天】だっけさ」

## 閑話　ベル・クラネルのある一日

ベル・クラネルの朝は早い。理由は特訓があるからだ。

運がいい事に、第一級冒険者であるリユーやアイズとの面識を持ったベルは、彼女たちから戦闘の手解きを受けることになったのだ。

祖父の影響で『ハーレムを作る』という一見無謀な計画を立てていたベルだが、蓋を開けてみればどうだろうか。ヘスティアを筆頭に数多くの美少女と出会う事に成功している。ここまで来ると出来すぎを疑うレベルである。これが仕組まれているならともかく、全て偶然なのが恐ろしいとベルも思わずにいられない。

「それじゃあ神様、行つてきます」

返事はない。

主神が惰眠を貪っている早朝五時過ぎ、ベルはホームを後にした。目指す先は「アスヘスティアトレア・ファミリア」の本拠地——『星屑の庭』だ。

静謐さを残した通りを進む。冒険者の街といわれるオラリオでも、こんな早朝からダンジョンに挑もうとする者は少ない。

「あつという間だったなあ……」

激動の冒険者生活を顧みて、苦笑する。

ベルが冒険者になってからまだ二ヶ月も経過していない。しかし、この二ヶ月は他の誰よりも濃密な時間だったと自負している。

オラリオに来てヘスティアのたった一人の眷属になり、冒険者となった。それからしばらくして、運命の出会いをする。輝くような金の髪に空色の瞳を持ったエルフの冒険者、リユーとダンジョンで出会ったのだ。あの瞬間を契機として、ベルの運命は加速し始めた。

リユーに教えを乞い、冒険者としての能力を磨き、『怪物祭』モンスターフェアで大立ち回りを演じ、リリという小人族バルウムの少女と行動を共にする事になり、遂にはランクアップまで成し遂げた。

つい先日、ヴェルフ・クロツツという鍛冶師の青年と友好関係を結び、今の生活はまさに順風満帆といったところである。

時折、第一の師匠であるリユーと第二の師匠であるアイズがにらみ合っていると聞くことはあるが、リユーもアイズもベルの前ではそんな素振りを見せてはいなかったのだ、そんなものは所詮ただの噂に過ぎないとベルは考えていた。現実是非情であることを純粋なベルはまだ知らない。





「あつ！ アリーゼさん！」

「あら、ベルじゃない！ 今日もリオンと訓練？」

『星屑の庭』にたどり着いたベルを迎え入れたのは「アストレア・ファミリア」の団長であるアリーゼだった。

人懐っこそうな顔立ちに、オラリオではあまり見かけない『ポニーテール』という髪型。元気潑刺という言葉が似合う少女はベルよりも五、六歳年上のはずなのに、ベルの目にはどこか幼く映った。

「はい！ 午前中ならリユーさんが空いてると言っていたので」

「……んー。そうだ！ リオンが来るまでもう少し時間があると思うから、その間に私と訓練しましょうか！」

「ちよ、ちよつと待ってくださいアリーゼさあん?！」

せつせと訓練の準備をするアリーゼにベルが悲鳴を上げる。

——アリーゼ・ローヴェル。体と武器に炎を纏わせることが可能になる稀有な魔法を有し、次々と自身の器を昇華させていった彼女に与えられた二つ名は『スカーレット・ハーネル紅の正花』。第一級冒険者とならぶLv6。加えて言うのであれば、手加減が苦手である。リユーも

大概だったが、アリーゼはさらにひどかった。初めて訓練を行ったとき、アリーゼに思いつきり投げ飛ばされて意識を飛ばしたのは記憶に新しい。

「大丈夫よベル！ Lv2になったあなたなら問題ないわ！」

「——無理に決まっているだろう、団長。そう言っただけで何度ベルの意識を飛ばしてきたのか」

「輝夜さん！」

そう言っただけで副団長である輝夜がベルとアリーゼの間に割って入った。絹のように滑らかな黒髪に極東の衣装である着物を着た輝夜はまさしく『大和撫子』と呼ぶにふさわしい。

「久しぶりだな、ベル。言うのが遅れたが、ランクアップおめでとう」

「ありがとうございま——うぷっ」

「ああ、この金の卵をリオンが独り占めするのはいただけない。今日は私が存分にしごいてやろう」

「か、輝夜さん!?! は、離してください……!」

「あらあら、クラネル様。そんなに顔を赤くしてどうなさいました?」

くすくすと笑いながら、ガラリと口調を変えて輝夜がベルに問いかける。極東では高

貴な身分であつたらしいので、その時の名残なのか、はたまたこれが素なのかは定かでないが、一つ言えるのは、この口調の時の輝夜は決まって誰かをおちよくるのだ。

今も初心なベルを抱きしめ、反応を楽しんでいる。しかも、胸が当たろうと下着が見えようと関係なしとくる。まさにベルの天敵だった。

「まったくもう。あんまりベルをいじめちゃだめよ?」

「団長には言われたくはないがな。なあベル、正直に言つて団長やリオンに教わるより私のほうがいいだろ?」

「い、いや……今日はリユースさんとの約束なので……」

「むう、リオンに義理立てする必要などない。私を選んだほうが良いことがたくさんあるぞ?」

ベルの目を見て妖艶にほほ笑む輝夜に二の句が継げないでいたその時、

「——ほう」

底冷えするような声がベルたちの背後から放たれた。

「輝夜、面白い冗談を言う。是非ともその良いことについて教えてほしい」

「リ、リユースさん……?」

「おはようございませす、ベル。申し訳ありませんが訓練はもう少し待つてください。先にこちらの用事を済ませませす。なに、すぐに終わらせませす」

リユーが小太刀を取り出し輝夜の前に立つ。それを見た輝夜もベルから離れると、同じように武器を手を取った。

「すぐに終わらせるとは大きく出たな。お前に剣を教えた者が誰か忘れたのか？」

「忘れてなどいない。だが、いつまでもベルに手を出しているところを見過ごすわけにはいかない」

「では、さっさと始めるとするか。私とベルの訓練の時間が無くなってしまふ」

「――」

ヤバい。このままではこの二人は全力で戦うだろうというのがベルにも理解できた。何とかしてもらおうと、縋るようにアリーゼの顔を見るが、とうのアリーゼはニコニコとしたまま、

「なら審判は私がやるわね！ 使っているのは木刀、魔法は無しで！」

「それで構いません。魔法をありにしてしまえば勝負になりませんからね」

「――ほう」

今度こそ二人の目の色が変わる。強い意志を宿した瞳がお互いを射抜く。もはや訓練がどうか言っている場合ではない。

(ど、どうすれば……!?)

発端がベルの以上、ベルが言えばこの争いは止まるのか。——否、ここまでくると止まらない。

では、まだ館にいるファミリアのメンバーを呼ばいいのか。——否、余計に油に火を注ぐことになるのが明らかだ。

ならば一体どうすれば——。

「——なら、ベルは今日私と訓練することにする」

突然、門を堂々とくぐってきて、金の髪と瞳をもった少女が宣言する。軽やかな足取りでベルの元にたどり着き、手を握って確保する。

「ア、アイズさん!? どうしてここに……?」

「気にしないでいい。私はたまたま通りがかっただけ。そうですよね、ベートさん」

「……ああ、そうだな」

「ベートさんまで……」

アイズに続いてベートも門をくぐってくる。どういいうわけか目に生気が宿っていないが、窮地に駆けつけてくれた喜びと安堵でベルはそれに気付かなかった。

一触即発の雰囲気だった輝夜とリユーも突然の来訪者に思わず武器を下ろす。

「ヴァナルガンド凶狼」……どういいうことですか?」

「知らねえよ、俺に聞くな」

まず口を開いたのはリユーだった。約束が違うぞと言わんばかりにアイズとベートに視線を向ける。

しかし、ベートからすれば堪ったものじゃない。

こんな朝早くからアイズに叩き起こされて向かった先が他派閥のホームの監視とくる。しかも、向こうでトラブルがあったのを察知すると乱入して漁夫の利を狙うというオプシヨン付き。今ここで怒鳴り散らしていないことをほめてほしいくらいだ。

「……あなたたちにベルは任せられない。ベルは私と訓練する、の……」

こんな状況になってもアイズは我が道を行く。それはさながら、お気に入り玩具を取り返そうとする子供のごとく。

「リオン」

「ええ、一時休戦といきましょう。どうやら先に【剣姫】にお灸をすえる必要があるらしい」

「また館を壊したらアストレア様に叱られるわよ?」

「問題ない、今の私はLv6。あなたたち二人には負けない」

アイズの言葉を受けて、リユーと輝夜が手を組み、アリーゼは我関せずと後ろに下がった。ベルは急激に変化する状況についていけずアタフタし、ベートは大きいため息

をついた。

そうして三人の剣戟が繰り広げられる。オラリオでも屈指の実力を持った三人——特にリユーとアイズの鬼気迫る様子を見て慄くベルの頭をベートは小突いて、

「巻き込まれねえ内にさっさと帰るぞ、兎野郎」

ベルを引つ張りながら出口へ歩き出した。再度大きなため息をついてベートは空を見上げた。

どうにか全てが穩便に解決する方法はないものか、と。



ざわざわと喧騒が鳴りやまぬ巨大なホームの中、独り酒をあおる男がいた。

ここはどこだ。己は何者だ。これはどういうことだ。——一体今はいつだ。

繰り返される自問自答。瞋恚の炎を瞳に映しながら、自身の内側から巻き起こる感情に耐えていた。

もはやここがどこで己が何者で今がいつだろうと関係ない。倒すべき敵さえ理解しておけばそれでいい。

「ベル・クラネル……！」「リトル・ルーキー……！」

過去に——未来で、ファミリアを、神との繋がりを、己の地位を奪った男の名前を吐き出した。



## 酒場での死闘

『ギツ……オオオオオオオオオオ！』

「来るぞ、ベル！」

「うん……！！ 行くよ、ヴェルフ！」

「援護します、お二人とも！」

草原が広がる1階層。ベルとリリ、そしてヴェルフは生み出された『オーク』の大量と戦闘を行っていた。数の差に押されてそれなりに苦戦はするものの、リリの的確なサポートと、戦う鍛冶師である「ヘファイストス・ファミリア」の一員でLv1の中で最も高い戦闘力を有するヴェルフが着実に敵を屠っていく。

そして、何より、

「——はあッ!!」

『オ、オオオオ……』

「……やっぱすげえな、Lv2ってやつは」

「ええ。まるで別人です」

リリとヴェルフが思わず感嘆の息を漏らす。

ベルの前では『オーク』が何体まとめてかかってこようとまるで相手になつていなかった。卓越したスピードで常に敵の死角に潜り込み、ヒットアンドアウェイ一撃離脱で敵を追い詰めていく様はまるで餓えた野兎のよう。

第一級冒険者たちに教えられた『技』と『駆け引き』を遺憾なく発揮するベルを止める怪物はこの『上層』にほとんど存在しなかった。

「【ファイアボルト】！」

『グオオオオオオオ!?』

火炎が雷鳴を轟かせながら唸る。新たな高みに至ったことでさらに凶悪になった火球に『オーク』は為すすべなく、灰へと姿を変えた。

「ふう……」

モンスターの魔石を回収して帰ってきたベルを二人は笑顔で迎えて、三人は帰路にいった。



「それじゃあ、乾杯！」

「お疲れ様です、ベル様！」

「うん！ おつかれ、二人とも！」

その日のダンジョン帰り、いつもより多くの稼ぎを手にしたベルとリリ、ヴェルフはその足で『豊穡の女主人』に訪れていた。次々と運ばれてくる麦酒エールと料理に舌鼓を打ちながら会話を続ける。

「おいベル、またあの二人いるぞ。お前の師匠は暇なのか？」

「あはは……そんなことないと思うけど……」

「リリは少し苦手です……。特にリユー様が」

リリが何かを思い出すように身を震わせる。

ベルがここを訪れるとほぼ確実にリユーとアイズのどちらががいるが、ベルからしてみればそれはもう日常のようなもので、特に気にかけてはいなかった。ちなみに、今日は両方いる。ベートも。

ベルが一人で来た場合は瞬時にどちらかに確保されるが、三人で来るときはこちらを優先してくれる。また、確保されても最後はベートが彼女たちからベルを引き剥がしてくれる親切設計である。ベルの中でベートの株はうなぎ登り、ベート様様といったところだ。

しかし、その代わり、リユーがウエイトレスとしている場合は、料理を出すついでにしれっとベルの横の椅子に座って休憩をとっているが。仕事をサボることなど、よほど

の緊急時でなければしなかつた過去のリユーとの違いに気づく者はいない。今回のリユーに対する周りの認識は『普段はまともだが、少年が来ると途端にポンコツになるエルフ』である。

「まあ、今日は二人ともこつちには来ないんじゃないかな。リユーさんのファミリアからは他に手伝いに来てないみたいだし。アイズさんのところはベートさん以外のファミリアの人もいるから」

そう言つてベルが視線を二人のほうへ飛ばす。

「さすがミア母さん……隙がない」

「ごちゃごちゃ言つてないでとつと働きな！」

リユーは？ 忙期のためせわしなく働いており、なかなかこちらに来る時間を何時ものようにとることができていない。もつとも、この時間帯で飯とはいえ従業員を遊ばせている余裕がないことを理解しているミアがリユーの離脱を許すはずもなく、常に見張られている状態だ。いつものようにベルのもとに向かおうとする従業員が二人も三人もいれば話は違うが、リユー一人ならば見張りと並行して他の仕事をこなすことなど、ならず者をまとめ上げるミア・グラランドにしてみれば朝飯前である。

「アイズさん、アイズさん！ 聞いてます!?!」

「……うん。聞いてるから少し落ち着いて、レフイーヤ」

「飯くらい静かに食べねえのかてめえ等！」

もう一方のアイズも、ベルとの直線方向にベートが陣取って座っているため、ベルの顔が見えない状態である。席を立とうにも横にいるレフィーヤがしきりに話しかけてきて、なかなかそれができない。ベル・クラネルの平穩は偉大な先達によつて守られているのだ。



「——その時リユーさんに助けてもらつて、そのまま流れて特訓するようになって……」  
「おいおい本当かよ。ベル運が良すぎねえか？　じゃあ、あの「劍姫」とはどうやつて知り合つたんだよ？」

「それはえーつと……」

料理を食べ終わった後も会話は止まらず、なぜかベルの身の上話やオラリオに来てからの出来すぎといつても過言ではない出会いについて語るようになっていた。酒が入っているのもあつてか、ベルとヴェルフの口もよく回る。

「アイズさんとも僕が『ミノタウロス』に襲われてる時に会つてただけど、一緒に訓練

することになったのは、怪物祭モンスターファイリアが始まる前の日くらいかな」

「怪物祭？　そういやそんなのあったな」

「うん。ちよつと困つてるところを助けてもらつて、それからよく会うようになった」

「困りごと、ですか」

「神様と待ち合わせしてただけど道が分からなくなつちやつて」

苦笑いするベルの脳裏にその時の情景が浮かぶ。

『……ベル、どうしたの？』

『なつ、ヴァレンシユタインさん!?!』

『……アイズでいいよ。……何か困つてる？』

『ちよつと道に迷つて……』

『いいよ、案内する』

そこから二人で行動したのだが、結局アイズも道がわからず迷つてしまい、いろいろな場所を歩き回っていたらとくに集合時間は過ぎ去っていた。ようやくヘステイアと合流した時には優に一時間を超えた後で、二人は見事に大目玉をくらったものだ。

なお、アイズは道に迷つたと言いながらベルと二人で歩きたかつただけである。さしものアイズも『ダイダロス通り』でもないただの路地で迷うほど方向音痴でもないし、ベ

ルのように住み慣れていないわけでもない。ただ、その事実を知っているのがアイズ本人だけなら、嘘も現実になるのだ。嘘も方便という言葉覚えてアイズに死角はない。

「偶然、の一言で片づけるのが難しいですね。こうも上級冒険者様と縁を結ぶと」

「しかも両方美人だしな。——なあ、ベル。お前あの二人となんかなの？ 明らかに気に入られてるだろ」

「——」

酔いの回ったヴェルフの何気ない発言を聞き逃すへまをする少女はいなかった。喧騒に包まれた店の中で数名が極限まで集中して、次に発せられるであろうベルの発言に意識を傾ける。——というか、アイズとリユーに至っては手を止めて、じりじりとベルの方に近づいて行っている。

これはすべてを終わらせかねないという緊張感から知らず知らずのうちに目が本気ガチになっている。

（止めるべきか……どうする？）

そして、ベートもこの緊急事態に頭を悩ませていた。ベルの性格上こんな質問に答えとは思えないが、万が一がある。特に酒を飲んでいるような日は。

そして、その万が一が来てしまうと荒れるのは目に見えている。ぶっちゃけ、ベートにはアイズが現時点で勝てるとは思ってない。だからといって、リユーが選ばれてしま

えばアイズに恋愛感情があるのかは置いておいても、まずい事態になりかねない。しかし、アイズが勝とうものなら『戦争遊戯』<sup>ウォーゲーム</sup>が起こりそうである。

やはり、ここはお茶を濁してもらうほかない、そう考えたベートはシラフにも関わらずちよつかいをかけに行こうかと本気で思った。だが、

「——ようやく見つけたぞ、ベル・クラネル」

一人の男の登場により、その思考が遮られた。

「僕、ですか？」

「ああ、そうだ。忘れたとは言わせんぞ。〔リトル・ルーキー〕」

きよとんとするベルに対して長身の男はいたって真面目そのものだった。同じ席に座っているリリとヴェルフも状況が呑み込めず静観しているが、ベートはいち早く状況を理解した。

（あいつは前回兎野郎のファミリアと戦っていた……。それに、あいつも同じか）

〔リトル・ルーキー〕という二つ名は前回の世界を知っていなければ出てこない言葉だ。であれば、ここにやってきた理由もわかるというもの。おおよそ前回のリベンジがしたいとかそういう類の話だとベートは推測した。まあ、あのベルに前回の記憶がない以上リベンジになるのかはわからないが。



しかし、この状況は良いものだとはベートは考えた。何せLv3になるために必要な人間が向こうからやってきてくれたのだ。前回のような激闘を再び繰り広げてくれるなら、こつちからしてみれば願ったり叶ったりだ。

故に、ベートも静観することにした。この男が何をするにしてもベートに不利益は生じないからだ。

「……すいません、僕覚えてなくて」

「——。そうかそうか、ならば思い出ししてもらおうとしよう……」

「それってどういう——ガッ！」

「こういうことだ、ベル・クラネル！」

突如迫った男の本気の拳がベルの頬を捉えた。いくらベルがLv2にランクアップしたからと言って、この男のLvは3。油断していたベルは受け身も取れずに店の奥まで吹き飛んだ。

賑やかだった店内も水を打ったように静まり、視線が二人に集まった。

こうなるかもしれないと思っていたベートでさえ、男の思いきりの良さに思わず、へえ、と声を漏らす。

だが、これでいい。とりあえず今回の件で二人には因縁が出来た。前回の裏事情を知らないからなんとも言えないが、前回もベルはこの男に一度敗れている。そう、だから、

ベルが殴られた程度何の問題もない。ベルが弱者の咆哮を再びあげるその時を待てばいい。

(いや、待てよ——?)

思考にノイズが走る。何かを見落としていないか？ 最近培われてきた危機感が警鐘を鳴らす。

状況が多少違うだけでやっていることは同じだ。客の前でベルが無様にも敗れただけ。何をそんなに自分ベイトは危惧している——？ 前回と違う所など場所と周りにいる人間くらいではないか——。

(あ、やべえ……！)

発見した。前回と致命的に違う点を。この違いは致命傷と言ってもいい。それほどまでに大きなものだ。このままではベルがLv3になるところではない。

男はそんなベートの心境など露知らず、気絶しているベルに向かって名乗りをあげた。

「我が名はヒュアキントス！ 賜った二つ名は【太陽の光寵童ポエプス・アポロ】！ ベル・クラネル、【リトル・ルーキー】！ 私は貴様を——ガハッ!?」

「——」  
風が、吹いた。次いで聞こえてきたのは何かが発射したような音。その音が男が机に

叩きつけられたものと気づいたのは、その少し後だった。

男——ヒュアキントスを机に叩きつけた本人たちは怒りの表情を浮かべ、

「ベルに謝って……！」

「どうやら命が惜しくないようですね」

誰もが呆気にとられた。ただ一人それを静かに見ていたミアは先程の爆発音にも負けない声量で、

「このバカ共！ ケンカするなら外でやりなア!!」

## 第一次逆行者会議

「このままじゃやべえ」

会議の口火を切ったのはベートだった。「ロキ・ファミリア」の本拠地である『黄昏の館』。その中のベートの部屋で会議は開かれた。

「やばい、とは？」

リユーがベートの発言の真意を探るように問う。青空を閉じ込めたような碧眼に見つめられ、ベートは頭をガシガシと掻いた。

「わかるだろ、アイツのことだよ」

「アイツってベルのこと……？」

「それ以外に誰だっつーんだ!!? お前等が暴れてくれたおかげで色々ぶち壊しだろうが！」

おずおずと口を開くアイズに思わず叫ぶ。

——ヒュアキントスの意識をアイズとリユーが刈り取った後、酒場は騒然とした。ミアが二人に雷を落としたかと思えば、何処から話を聞きつけたのか知らないが、ヘステイアが登場し、続いてロキ、アストレア、アポロン、ついでにヘルメスまで出張って

来たのだ。すると今度は何故か神々の間——主にヘステアとロキ——で喧嘩が発生し、みんな仲良く店の外に放り出された。

伸びている者がいて、時間も時間だったので続きは後日ということになり、その日は解散して今に至る。

「で、でもベートさん！ アイズさんだつて故意では無いと……思い……ますし……」

「あの行動のどこを見たらそんな発言が出てくる!? 故意以外何物でもねえ！」

「あうう……」

なんとかアイズの行動を擁護しようとしたレフィーヤもベートに一喝され、小さな悲鳴を上げる。

自分の前で逆行したことを隠していた——というか、気付くきっかけと時間がベートになかった——レフィーヤを見て大きく舌打ちした後、

「まあいい、お前等だつて覚えてんだろ。兎野郎がLv3になった出来事をよ」

「もちろんです」

「ベルがこの人を倒したから、でしよ?」

こう、こうつ。とアイズがあの時の再現をしながら椅子に座らされている男の方を向く。

煽られた男——ヒュアキントスは忌々しげに顔をゆがめて、

「【劍姫】、その不愉快な動きをやめろ。……いや、それより、早くこの鎖をほどけ」

ヒュアキントスは幾重にも己に巻かれた鎖を鳴らした。昨日、ヒュアキントスの身柄を預かったのは「ロキ・ファミリア」だった。アポロンもヘスティア相手ならともかく、ロキとアストレアを敵に回して無事でいられるとは思っていなかった。なので、ヒュアキントスを回収することができず、その場は引き下がった。当然、ヒュアキントスは野放しにしておくわけにもいかないので、鎖を巻き、放置していたのだ。顔には昨夜の死闘の跡がはつきりと残っていて、頬が赤く腫れている。

「けっ、昨日あんなだけポコポコにされたのに元氣じゃねえか」

「うるさいぞ、駄犬。貴様らの邪魔が入らなければ、アポロン様にもお手を煩わせることなどなかったというのに」

「テメエが悪いだろうが！　この二人の前で兎野郎を殴ればこうなることくらい分かれ！　」

「無茶を言うな！　誰があんな小僧の後ろに貴様らがいると思うのだ!？」

ベートからの無茶ぶりにヒュアキントスもたまらず叫ぶ。

「大体、あの戦争遊戯ウォーゲームに参戦していたエルフが【疾風】だと!?　これが!？」

「これが、とはずいぶんな言い草ですね」

「それに、【リトル・ルーキー】の師が【劍姫】だと!?　この!？」

「このつて……?」

「分かるわけないだろう!」

「だから、しつかり調べて兎野郎が一人にいるところを狙いやがれ!」

「それなら良かったのか!?!」

「良いに決まってるだろうが!」

男性陣がどんどんヒートアップしていく。お互いに相容れない存在だと前回から思っていたが、なかなかどうして波長が合う。理不尽に巻き込まれた者同士、何か通じ合うものが生まれたのかもしれない。

しかし、そんな二人の軽率な発言を認められない者もいるのだ。

「凶<sup>ウアナ</sup>狼<sup>ルガンド</sup>、太陽<sup>ホエブス</sup>の光寵童<sup>シアボロ</sup>」……?」

「二人とも、何言ってるの……?」

「あわわわわ……! ふ。二人とも落ち着いてください!?!」

リユーとアイズがそれぞれ剣をベートとヒュアキントスに向けていた。ベルだけでも殴り飛ばしてはいけならしい。



「……少し取り乱した」

「……話を戻すぞ。このまま戦争遊戯ウオーゲームが起こらなかつた場合、いくつか問題がある」  
そうベートは話を切り出した。

一つ目は、単純にベルがランクアップしないこと。絶好の機会をみすみす逃したのだ。今頃は向こうも神々が四神会談でも行っている頃だろうが、流石にこの状況からアポロンーヘステイア間で戦争遊戯ウオーゲームは開催されないだろう。ロキとアストレアまで介入してくる可能性のある勝負に挑む神など存在しない。

二つ目は、戦争遊戯ウオーゲームが開催されないことによる「ヘステイア・ファミリア」の強化機会の喪失。詳しくはベートも知らないが、この出来事を契機に「ヘステイア・ファミリア」はベル一人から数人の増員が加わっていた。ならば、その機会がなければベルはずっとたった一人の眷属のままだろう。

ベートが自分の意見を述べると、リユーが思案するように目を閉じた。

「ベルは大丈夫です。彼は——彼らは強い」

それは、万感の想いが詰まった言葉だった。リユーの青い瞳には確かな信頼が宿っていた。

「……口だけなら何とでも言える。俺は弱よえだけの兎野郎になんぞ用はねえ。お前等がそれでもいいと思っけていな」



「……ええ、確かに私はベルが強くななくても良いと思つています。彼に傷ついてほしいなど望んでいないのだから。しかし、彼は強くなる。身も心も。たとえ今回アードさんたちがファミリアに入らなくとも、いつか必ず彼のもとに集う。彼という光に引き寄せられて」

私がそうでしたから、そうリユーは締めくくつた。同じく目を伏せていたアイズもそれに続いて口を開く。

「……ベルはすぐに強くなる。ランクアップする方法だつて、ちゃんとある」  
「ああ？　なんだよそりや」

アイズの発言にベートが疑問を投げ掛ける。アイズはすつと指をヒュアキントスに向けて、

「簡単なこと。この人とベルをまた戦わせたらいい。それでベルはまたランクアップする」

「——言うではないか、『劍姫』。私が二度あのような小僧に遅れをとるとでも？」  
「……ベルなら勝てる」

アイズに断言され、ヒュアキントスは目を見開いた。苛立ちを含んだ言葉で反論しようとしたが、前回負けたことには変わりないので大人しく引き下がる。次に勝てばいい、と自分を納得させた。

「なら、舞台はアストレア様に頼んで都合してもらいましょう。そちらからも神ロキに言伝をお願いします」

「ああ。んでもう一つ話がある」

「もう一つ、ですか?」

レフィーヤが問いかける。ベートはレフィーヤの目を見て、

「ここからは兎野郎なんて関係ねえ。これから起こるイッヱルス闇派閥の事件の話だ」

ベートの発言に各々の目が細められる。闇派閥とは「アストレア・ファミリア」も「ロキ・ファミリア」も浅からぬ因縁がある。「アストレア・ファミリア」は彼らが原因でファミリア壊滅の憂き目にあい、「ロキ・ファミリア」も仲間の眷属を抗争で何人も失っている。

「あ、あの! 皆さんはどこまで知ってるんですか!?!」

レフィーヤにとつてそれは無視出来ぬものだった。過去に戻ってきたレフィーヤを襲ったのは、何物にも変え難い喜びと掛け値なしの絶望だった。それは、再び友である同胞を目の前で失うということだったから。

——フィルヴィス・シャリアという少女がいる。

『27階層の悪夢』によって人としての生を奪われた誇り高きエルフ。彼女はあの時、食人花によって確かに命を落とし——そして、レヴィスやオリヴァス・アクトと同じく『魔

「石」を体内に埋め込まれ、怪物となった少女。死を偽装し、主<sup>ディオニユス</sup>の神意を遂げるために身を砕き、それでもなお、友達<sup>レフィーヤ</sup>のことを想った少女。

彼女がまだ生きていて、周りを取り巻く状況を変えることが出来るかもしれない今、レフィーヤの心は決まっていた。

「どこまで知ってるのかをお前に確認してんだよ。アイズもこの馬鹿エルフもその情報交換は終わってんだ」

「……私が戻ってきたのは、クノツソスへの侵攻が二回終わった後です」

かの名工ダイダロスが作り上げようと夢見た人口迷宮<sup>クノツソス</sup>。一度目は「ディオニユス・ファミリア」の全滅を招き、辛うじて脱出。そして、二度目は死んだはずの少女——正体を明かしたフィルヴィス、ディオニユスとの争い。その二つを見てきたとレフィーヤは言った。

「では【劍姫】と同じですか」

「ああ、そうだな」

「……？　じゃあベートさんと、その、えーつと……」

「リユーで構いませんよ、【千の妖精<sup>サウザンドエルフ</sup>】」

「あつはい！　そのリユーさんたちは一体どこから戻ってきたんですか？」

「……私たちは第一次侵攻までしか知りません。【劍姫】は貴女と同じ時期から戻ったよ

うですが」

「大体のことはアイズから聞いている。全く舐められたもんだぜ」

「……そんなことないと思うけど」

比較的冷静なりユーに対してベートは苛立ちを隠そうとしない。事の顛末を未来のレフィーヤたちから聞いているアイズはそれを全て話している。もちろん、ベートがフィルヴィスに舐められていたことも。本人にその意があつたかは定かではないが、ベートはそう解釈していた。それに、味方だと思っていた神が実は敵だったときた。これだから神は信用ならない、と唾を吐く。

「なら、直ぐに行動したら——」

「無駄だつつの。『27階層の悪夢』とかいう事件は今回も起こってる。もうアイツはバケモンだ」

「ベートさん！ 私には分かりませんが、フィルヴィスさんは化物なんかじゃありません！ 私たちと同じ、一人の女の子です！」

「……ならテメーがアイツを何とかしやがれ。テメーがどうにも出来ないなら、後はこつちで勝手にやらせてもらおう」

「——」

ベートの思いもよらない発言にレフィーヤは目を丸くした。問答無用で話を進めよ

うとするのかと思えば、レフィーヤの意見を尊重してくれた。まあ、ベートに言わせてみれば、自分より向いていそうな人間に自分が向いていなさそうな仕事を放り投げただけである。

——ただ、ベートは決して認めないだろうが、戻ってきてからくだらない痴話喧嘩に巻き込まれてきたせいで、他者の意見を取り入れて行動を尊重するという考えが以前よりも芽生えてきたのかもしれない。

レフィーヤは内心ベートに感謝して、

「私が必ずフィルヴィスさんを止めてみせます。もうあんな事件は起こさせません！」

そう大きく宣言した。ベートもリユーもアイズもそれに反対はしなかった。もしレフィーヤが出来なくても、今の自分たちならば事件への対応を素早く取って、未然に防ぐことも不可能ではないからだ。

「——ふん、話は終わったか」

すると、ここで今まで口を閉ざしていたヒュアキントスが口を開いた。

「……：そういうやテメーは何時から戻ってきたんだ」

「あつ、そうです！　もしかしたら私たちより沢山情報を持つてるかも知れませんか！」  
ベートが探るような目で尋ね、レフィーヤは目を輝かせている。未だにベルへの謝罪がないことを気にしているリユーとアイズは訝しむように顔を向けた。

ヒュアキントスは大きくため息をつくど、

「私はあの小僧に敗れてからこのオラリオを出た。貴様らの言う事件なぞ知らん。興味がなかったからな」

「——はあ」

「おい、なんだその目は。【疾風】、【劍姫】！」

露骨に失望したような表情を二人が作り、ヒュアキントスが怒りで顔を赤く染める。レフィーヤも思わず苦笑いし、ベートは座っているヒュアキントスを見下ろしながら、

「——使えねえな」

「貴様ア!!」

## 組み合わせは如何に

——第一回眷属闘争ファミリアバトル 一カ月後にコロシウムにて開催。

そんな知らせがベートたちの耳に入ってきたのは、逆行者会議が開かれた三日後のことだった。

発案者はリユーの提案を受け入れたアストレアとアイズきょうはくの説得を受けたロキ、そして、面白そうだからと便乗してきたヘルメスである。ついでに言うところ、ヘステアとアポロンもいる。

大会で勝利した時に手に入る賞金は自分たちのファミリアが受け持ち、チケツト代を含めた入場料をギルドに還元するといわれたら、ギルド長ロイマンも首を縦に振った。ガネーシヤも丸め込んだ彼女たちはそのままの勢いでウラノスも納得させ、無事に開催に漕ぎつけることができた。

開催にあたってロキたちが定めた規則ルールは大まかにいうと四つ。

- ・ 対戦はお互いの同意のもとに行われる。

- ・ お互いのレベルに差がある場合、もしくは、同じファミリア内での対戦の場合は賞金は支払われない。また、その場合はお互いが対等フェアだと判断する条件ハンデを設定することも

可能とする。

・ケガをしても文句を言わない。

・みんな仲良く楽しくやろう！

冒険者は力の競い合いや賞金獲得を目指して対戦相手を求め、一般人は超人的な能力を持った冒険者の実力を間近で見ることができると、彼らを一目見ようとオラリオが湧いた。ベルとヒュアキントスを公衆の面前で堂々と戦わせるためだけにこの催しイベントが作られたことを、人々は知らない。

「……ちゅーわけで、見事に祭りは開けるようになったでーアイズたん！」

「……ありがとうございます」

褒めて褒めて！ と飛び掛かってくるロキを華麗に躲し、アイズは小さく礼を述べる。ここまでは予定通りだ。ロキたちは立派にその役割を果たしてくれた。だから――

「後は私たちが頑張る番、ですね」

「なにしれつと俺を入れてんだよ。一人でやりやがれ！」

「……………チツ」

「おい」

ベートにすぎなくあしらわれ、アイズが不満げに頬を膨らませる。レフィーヤは一刻



も早くファイルヴィスと友好関係を築くために試行錯誤を行っている最中で、ヒュアキントスは追って連絡するだけで伝えてすでに帰らせた。

そして、ベートも暇ではない。前回よりも平和な世界ということで、より狡猾かつ慎重になった闇派閥への情報収集——つまり、人工迷宮のこともある。フィンならばある程度は予測を立てているかもしれないが、情報を拡散しすぎると逆にこちらが危険になる。なんせ、敵は真正銘神なのだから。故に、話す人とタイミングは慎重にならなければならぬ。

今呑気に過ごしているのはアイズとリユーくらいだろう。そして、リユーは不倶戴天の敵（仮）、仲間にはなり得ない。

「……にしても、ずいぶんとんとん拍子に話が進むもんだな」

「まあ、神々ウチらからしたらこんなうまい話逃すはずもないやろうし、色んな所で金が動くからなあ」

今頃ほかのファミリアも大変やでー、とベートの問いにケラケラ笑いながらロキが答える。

開催が決定されてからというものの、生産系のファミリアは大忙しである。ゴブニュやヘファイストスという鍛冶を中心に行うファミリアはイベントに参加しようとする冒険者からの発注で目を回し、デイアンケトたち医療系のファミリアは今が稼ぎ時だとい

の色を変えて回復薬を生産している。

ギルドとしても、今回の話は悪いものではない。ほとんど出費をせずにお金だけ手元に入ってくるというのだ。加えて、市民の娯楽、ガス抜きまで向こうが提供してくれる。冒険者の力を見せつけることで畏敬の念を植え付けるとともに、こんなに強い人がモンスターと戦っているという安心感まで与えることができる。まさに Win-Win の関係というわけである。

また、もし問題が発生しても多少は気にしない。そもそも第一回と銘打っているものの、第二回を開催する予定はない。この手の祭りは怪物祭モンスターファイアが既に存在している。それに、フィンを筆頭に高レベル冒険者はあまり乗り気ではないことも知っているので、これっきりの開催になるだろう。

「じゃあ、失礼します……ベルがどこにいるかベートさん知ってますか？」  
「知ってるわけねえだろ」

「ドチビのとこの子供？ それならダンジョンに向かっているのを見たでー」  
「ちよつと出かけてきます」

それだけ言い残すと、アイズは武器を持って部屋を出て行った。まさかダンジョンに今から行くつもりだろうか。いくらベルの攻略している階層を知っているとはいえ、流石に無謀ではないかとベートは思ったものの面倒くさいので止めはしない。

「ウチのアイズたんが遠くに行つてしまふ……」

ロキがシクシクと泣きながらベートのほうへ視線を送る。それが嘘泣きだとわかっているのでベートは舌打ちで返す。

以前はベル許すまじと燃えていたロキではあるが、アイズとベートの話を聞いているうちに考えが変わつてきた。

アイズの横に並び立つても問題のない白く純粋な心を持った少年。巨乳トロリ女神チフィルターを外せば白い髪に赤い目となかなか可愛い顔をしている。そして、なりによ  
り、アストレア・ファミリアの冒険者とフレイヤ本人がベルを狙っているという事実。

この二柱の女神に対抗心を抱いているロキは思った。アイズ本人が望んでいるならばいいかと。

——いやまあアイズたんをくれてやる訳じゃないけどそれはこれこれという訳で仲良くお友達になつて一緒に遊びに行つてレベルもアイズたんと並ぶくらいに成長するなら考えてもやらんことは無い……いややつぱりちゃんとあいさつに來させないといけないかな！ フィンたちと面談しないと



翌日、町を散策していたベートは何時ものごとくりューに捕らわれて『豊穡の女主人』に足を運んでいた。ベートもそろそろ来ると思っていたので文句を言わずに大人しく席に着く。

「……………んで、どうなったんだ」

「それが……………」

ベートの正面に座ったりリューがぼつぼつと話し始める。

ベルを説得いいくるめるすることには成功した。ヒュアキントスも同意したので対戦は無事に行われることだろう。だが、一つ問題ができた。対ヒュアキントスに向けて一緒に訓練しようとして出たら、なんと劍姫も同じことを言いだしたらしい。心の優しいベルは私を選べばいいのに迷ってしまっている、と。

「【劍姫】は前回ベルの訓練相手をしたのならば、今回は私に譲るべきではないかと思うのですが」

「……………ハア」

見事な理論武装に、さしものベートもため息をつく。何がすごいかといえば、昨夜ダンジョンから帰ってきたアイズも同じようなことをベートに言ってきたことである。確か、アイズの理論は『私は二回目だからオンスンさんよりも上手に教えられる』だったか。まあ、どちらの言い分もわからないことはない。問題は、それをベートに伝えられ

でも困るということだ。ベートはベルの保護者ではないし、どちらが教えようとベルが勝つならば問題はない。

「【劍姫】に私の意見を伝えに行っても、『私の方が強い』の一点張りです。話になりません」だから貴方をこうして呼んだのです、とリユーは至極真面目に言う。確かにアイズなら言いそうだ。人にものを教えるときに必要なのは圧倒的な実力ではなく、教え方や言葉なのだがそんなものに屈するアイズではない。ベルならば自分の言いたいことを理解してくれると信じているのだ。

そろそろ、この役割をレフイーヤに押し付けようかとベートは本気で思うようになってきた。これならばヒュアキントスと愚痴を言い合っていた方がよほど楽しいのではないか？　なんて思考まで出てくる始末だ。

いや、でも多分それは楽しくないかなと思いついて口を開く。

「俺はどつちが受け持とうと興味ねえ。だから」

「……だから？」

「運試しで決めるぞ」

ヤケクソである。



その日の夜、同じく『豊穡の女主人』に集まったりユーとアイズ、そしてベートは一つのテーブルを囲んで座る。

ベートの手には先ほど買ったランプが握られていた。これから起こるであろう出来事にリユーは得心して小さく声を漏らし、アイズはクエスチョンマークを頭に浮かべた。

「今からコイツで勝負してもらおう。ルールはそつちで勝手に決めてやれ」

「では、ポーカーなどどうでしょう」

これなら勝てると、すかさずリユーが言う。ファミリアにいる手癖の悪い小人族バルウムにイカサマの技術テクニクを教えられた自分ならば簡単に勝てると判断してだ。ベートもイカサマにとやかく言う気はないのでこれは正しい判断と言えるが――

「……それ、やったことない。ババ抜きじゃ、ダメですか?」

「……仕方ありませんね」

(狡いことばつかじやねえか!)

ドン引きするベートの横でアイズが小さく拳を握る。アイズもポーカーの経験からいある。何度かフィンたち幹部のメンバーで集まった時にやったことがあるからだ。アイズもポーカーフェイスは出来るはずなのに何故かとてつもなく弱いだけでルール

もしっかり把握してる。

つまり、アイズはポーカーをやったことがないのではなく、  
（自分が勝つような勝負を）やったことがないのだ。

それに比べてババ抜きなら、ポーカーフェイスを意識して無心で引いていけば特に技  
術がなくとも勝てる勝負だ。

無表情のアイズに気付かず、リユーはババ抜きの準備を進めていく。

「ではもう一度ここで確認を。勝者がベルと訓練する権利を得て、敗者はこの催しが終  
わるまで二人で訓練を行わない、と」

「……わかりました」

「屁理屈をこねられても困りますから、もう少し詳しく——」

「いいから早くやりやがれ！」



「——私の勝ち、ですね」

「——そんな……」

馬鹿な、とアイズが膝をつく。手には主神にどこか似た道化師ピエロのカード——  
外れ札ジョーカー

だ。

目を離す隙も無いほど早く、運命は決定した。それも原因は――

「アイズよオ、お前ただけ弱いんだよ」

「……そうですね。ここまですんなりいくのは中々起こりません」

偏にアイズが弱かったからだ。リユーが持つジョーカーを的確に引く能力。手元から離れたジョーカーが次の番には自分の手札に帰ってきていた。もう逆に凄イレベルである。無心で札を引いていてコレは最早奇跡。なぜババ抜きを選んだのか分からなくなってくる。

初めはイカサマする気満々だったリユーも少し申し訳なさそうにしている。だが、リユーもファミリア内での会議をサポートして参上している身である。そう簡単に譲るわけにはいかない。

「ま、まあ、勝負は私の勝ちですのでベルとは私が訓練します。……あの【剣姫】……大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないっ……」

そう言い残してアイズはとぼとぼと店を後にした。こちらに見せた背中が少し悲しそうだったのは間違いではないだろう。とはいえ、もともとこういう約束なので仕方ない。あの鬱憤は恐らくダンジョンでモンスターにぶつけるに違いない。



ベートからすれば、二人で教えたなら良いんじゃないかねえのか、とか色々言いたいことは出てくるのだが、それは駄目らしい。なんとも難しいものだ。

「あー！ リオンはつけーん！」

「アリーゼ、どうしたのですか？」

「良いことを教えに来たのよ！ 喜びなさいリオン！」

トランプの回収を行っているところに「アストレア・ファミリア」団長のアリーゼがやって来た。頬はやや上気し、急いでやって来たことが見てとれた。

「前にね、もうすぐ遠征に行かないと行けないって話をしてたじゃない？ いつ行こうか悩んでたらベルが大会に出るらしいじゃない！ だからね——ベルの戦いの前に遠征へ行こうと思ったの！」

ピシリ、とリユーが固まった。

「ア、アリーゼ。もう一度お願いします」

「だーかーら、三日後に遠征に行くのよ！ 『深層』の未到達領域まで一直線——！」

もう書類もギルドに出してきちゃったー、とニコニコ笑うアリーゼに今度こそリユーが完全に停止した。『深層』までの遠征ともなれば数日で帰って来れるものではない。それが分かっているからだ。

遠征は高位のファミリアにとって義務である。破れば重いペナルティが課せられる。

別にリユー一人ならば行かなくてもペナルティに接触することは無いが、それは出来ない。『深層』とは未知の領域——何が起るかわからない本物の地獄だ。リユーが居るかないかではファミリアの生存率は段違いとなる。

「な、何故もつと早くに相談してくれなかったのですか！」

「だってリオン集まりに来なかつたじゃない」

「な——」

痛いところを突かれてとうとうリユーが屈する。せつかく纏めたトランプはリユーの手から落とされ、再びバラバラになった。

蒼白になったリユーの顔から雫が零れたのをベートは見て見ぬ振りした。

「なら俺からアイズに言つてやるから、てめえはとつと遠征の準備でもして来いよ」

その言葉に嘲りはなかった。ちよつと見てられない。顔を背けたのはベートに残つた良心故か。

幸福の絶頂から地獄のどん底まで突き落とされたかのような人間を、こんな下らないことで目にするとは思つてなかつた。

「——待ってください」

リユーが消えそうな声でベートを呼び止める。ベートがリユーに向き合うと、リユー

は胡乱な瞳に、やはり涙を貯めていた。

「彼女にベルを任せる訳には行きません」

「……なら誰がやるっつーんだ」

「貴方です」

「……………アア？」

「ヴァナルガンド凶狼、貴方にやって貰いたい」

「はあ!？」

——死なば諸共。リユウの決断にベートは頓狂な声を上げた。

——机に散らばっている道化の札だけが彼らを嗤っていた。

とつくん!

——私の代わりにベル・クラネルに稽古をつけてやってほしい。

リユーからベートはとんでもない依頼を受けた。

冗談じゃねえ。なんで俺が。すぐさまベートは拒否して、話をアイズに持って行った。あれだけ執着していたのだ、大義名分さえあれば飛びつくだろうと。ところが、

『私がやらないって約束したので……。ごめんなさい、ベートさんがやってくれますか……?』

律儀に約束を守ろうとするアイズに断られた。これは、『めちやくちややりたいけど、ここで誘惑に負けたら次からアイズの番の時にリユーが侵攻してくるから、めちやくちややりたいけど今回は我慢しよう』という高度な心理戦を行った結果である。なお、実際にアイズが訓練相手をしていたら、リユーはアイズの想像通り——いや、想像以上かもしれない——に動いたので、結果的には正解だったといえる。

この一月にも満たない期間の過ちでこの先の安息の地を荒らされるのは我慢ならぬ。これからも大きな出来事はたくさんある。ここは雌伏の時だと自分に言い聞かせた。内に潜む幼い自分アイズも同意してくれた。一時の癒しに目を奪われてはならない。真

なる敵は自分ではなく同じ目的を持った他人である。

だが、ベートとしてはたまったものではない。どうして自分がこのような役割を押し付けられねばならないのか。およそ自分には向いていない役割だと自覚している。二人の高度な心理戦を把握しきれていないベートはストレスが溜まる一方だ。

しかし、アイズもやらないといった以上、ベートがやるしかない。やらねばそもそもベルが勝てないどころか、勝負にすらならないだろう。魔導士のレフイーヤには任せられない。ヒュアキントスも論外だ。が、気乗りしない。何か方法はないものか。

そこで、閃いた。とりあえず、何日か受け持つて、ベルがベートのスパルタ指導に耐えられなくなったときにアイズに押し付けたいのではないか。流石のアイズも、ベルが泣きついてきたら意思を曲げざるを得ないだろう。リユーにはうまく説明したらいい。

そうと決まれば善は急げ。ベルにおおよその流れを説明して、次の日から訓練が開始された。目標は、前回のアイズよりも、今回のリユーよりも厳しく徹底的に。やる気に満ち溢れたベルとあまり乗り気ではないベート。それぞれの想いが交錯する。



——訂正。この男、ノリノリである。



「ベートさん、ずいぶん楽しそうですね」

「あ、確かに！　なんだか新鮮でした！」

「……………チツ！」

特訓が始まってから二週間は経過した頃だろうか、本拠地<sup>ホト</sup>で食事をとっている最中にアイズとレフィーヤにそう言われてベートは苦虫を噛み潰したような顔を作った。だが、レフィーヤたちの言葉は否定せずに。

ちらほらと追跡者<sup>ストーカー</sup>が自分たちを見ていたことは知っているが、面と向かって言われるとややイラつとするものだ。

特に、今のアイズの『ずいぶん楽しそうですね』には精一杯の皮肉がこもっていた。アイズは『(あんなに嫌がっていたのに二人きりで)ずいぶん楽しそうですね(皮肉)』と言いたいのだ。うるせえ。大馬鹿二人も少しは純粋なレフィーヤを見習ったらどうだ、

と内心毒を吐く。

——彼には、幾つか誤算があつた。

第一に、ベルの戦闘スタイルがベートに近いものだったということ。ベートが己の肉体で戦うのに対し、ベルはナイフを用いた戦闘を行うなど細部の違いはあつたものの、二人の根本は『優れた足を活かした遊撃』であつた。故に、他者にものを教えた経験が皆無に近いベートでも、幾つもの心得を分かりやすく教えることが可能だつた。

……少しずつ己のスタイルに似てきてしまつた少年ベルに少し危機感を覚えたが、今更言われてもどうしようもないので放置することにした。

元はといえば、勝手に遠征に行つた少女エルフとババ抜きが信じられないほど弱い少女ヒューマンが悪いのだ、俺は悪くない。ベルがナイフを匣に蹴りをお見舞いするようになってきたとしても、俺は悪くない。

第二に、少年ベルが折れなかつたことだ。当初はすぐに訓練を辞めるつもりだつたので、最初からトップギアで訓練を進めた。勿論、受けたからには手は抜かない。初日に血反吐は吐かせたし、休憩も最小限しか与えない。いつかのように言葉のナイフでベルを攻



撃した。散々ベルを嘲るような口調で、もう逃げだしたらどうだと、お前はその程度かと、弱者に唾を吐く。

前回はベートの言葉で奮起したベルだったが、今回は無理ではないかとこつそり様子をうかがっていたアイズとレフイーヤが思ったほどだった。

しかし、ベルは立った。己の足で、己の信念に従って。次の日もめげずに訓練場へ足を運んだ。——これは偏に、ベルのベートに対する好感度が限りなく高くなっていた為なのだが、そんなこととは露知らず、キツチリと訓練に訪れるベルにベートは密かに高揚した。やはり、コイツは本物だ。本物の『冒険者』だと。ベートが他者に求める冒険者像にベルは当てはまっていた。

そして、最大の誤算。

第三に、—— 楽しかったのだ。

半年足らずでレベルを三つ上げたとしてつもない潜在能力。格上に対して果敢に挑む反抗心。土壇場で発揮される不撓不屈の精神。その才能は今回も健在だった。

前日に嫌というほど教え込まれたものというのは、どれほど物覚えが悪い人間でも多少は身に着けてくるものだ。基本的な能力アビリティに反映されずとも、技スキと駆け引きキルは少しずつ己がものとなる。技術の巧拙の差は「ステイタス」の差を埋める重要な要素となる。

ところが、ベルの場合は些か事情が違った。前日に教えたものが、次の日にはある程度様になっていく。その次の日にはより改善され、そのまた次の日には立派な武器へと変貌を遂げている。「ステイタス」も同様だ。Lv6のベートからしたらまだ誤差のよなものでも、着実に速くなっている。目を見張る速度で強くなっている。毎日訓練を共にしているベートにすらはつきりと感じ取れるのだ。ここ数週間ベルと出会ってない人間が今の少年を見たら、別人だと疑うほどだろう。

いつしかベートはこの少年の進化を見るのが楽しみになっていった。今ならば、彼女たちの気持ちができる気がした。この少年の成長を間近で見たい。いつになったら自分たちに追いつくのか——追い越すのか。ほかの人間には任せられない、任せたくない。

この少年は正真正銘、『英雄の卵』だ。このままいけば、まだベートには見えない頂の景色——【猛者】<sup>おうじや</sup>のステージまでいつか手を掛けることが可能なのではないのか。

それをすべて自覚しているから、ベートは少女の言を退けなかった。認めるのは実に癪だが、ベルとの訓練は好ましい時間だ。

「……まだ一週間以上あるんだ、邪魔すんじゃないぞ」

そう言い残して、食事を終えたベートは本拠地<sup>ホト</sup>を後にした。狼の尾が不機嫌そうに揺れている。自分の感情の変化と、それに伴う周囲の変化に敏感なのだろう。

そんな彼の腰には双剣が下げられており、今からダンジョンに向かうのが見て取れた。

ここ最近のベートの動向はフィンを筆頭に多くの「ロキ・ファミリア」の団員にバレている。まあ、隠そうとしないため当然ではある。

他派閥の団員と個人的に深いかかわりを持つなど、フィンも多少は小言を言いたくなつたものの、よりにもよつてそれがベートとアイズだつたため静観することにした。

ロキが比較的寛容だつたという点もあるが、この二人——特にベート——は孤独を嫌わない性格なので交友関係がいつまでも狭いままだつた。それが一人の少年を巡つて少しずつ改善されている。最近では少年の迷宮探索アドバイザーなる人物とも交流したらしい。交流といつても、ものすごい剣幕で叱られただけらしいのだが。流石にLv2の少年をいきなり『下層』のモンスターと戦わせようとするのはどうかと思う。アイズでもやらなかつたよ、とフィンは苦笑した。

また、こつそり訓練の様子を見に行ったフィンとリヴェリア、そしてガレスは少年の成長速度にも驚いたが、何より一番ベートの変化に驚愕した。

今となつては、是非ともこの関係を続けてほしいと思うほどである。幸いにも少年のファミリアは出来立ての弱小ファミリアだ。金銭的にも戦力的にもまだまだ未熟、支援が必要な頃だろう。同じように「アストレア・ファミリア」も色々と画策しているそう

だが、問題ない。その手の勝負ではこちらに分がある。フィンとロキが組めば敵なしだ。ファミリアごと取り込んでしまえばいい。そう二人は陰でほくそ笑んだ。

「アイズさんアイズさん！ 見ましたか今の！」

「うん、ベルはすごいね」

ベートを見送った後、アイズとレフィーヤは顔を見合わせる。

繰り返すが、ベートの戦闘スタイルは己の肉体の能力を存分に発揮した肉弾戦である。距離リリーチのカバーなどを目的に魔法を吸収する特殊装備プロスウィルトを身に着けているが、それだけだ。使えるとはいえ、普段全く使用しない双剣をわざわざダンジョンに持っていく必要はない。それなのに、彼の腰にそれが下げられているということは、答えは一つしかない。

「ベートさん、武器の練習しに行っただすよ!!」

以前の彼とはまた違ったその姿に、レフィーヤは満面の笑みを浮かべた。

## 酒場の少女から見た冒険者たち

「ほら、シル！ サボってんじやないよ!!」

「サボってなんかいませ〜ん!」

店長の張り上げられた声にまだ幼さの残った少女が返事をする。

夜のとぼりが落ちてきた頃、『豊穡の女主人』は最も忙しい時間帯を迎える。エルフにドワーフ、小人族バルウム ヒューマンに人間果てには獣人と全ての種族が酒を煽り、互いのジョッキを鳴らしながら一日を締めくくるとののだ。

ギルドがあり、『冒険者通り』と呼ばれる通りの近くに存在するこの店には、ダンジョン帰りの冒険者がそのままなだれ込んでくる。生きるか死ぬかの間を常にさまよう冒険者たちにとって、生を実感できる欲求を満たすことは明日以降への活力にもなる。ここで働く少女——シル・フローヴァはそんな彼らを見ているのが好きであったし、話に混ぜて冒険譚を聞くのも大好きだった。

とはいえ、今夜はどうも勝手が違った。

「ミア母さん、人が多すぎますー!」

「ごちやごちや言う前に手を動かしなあ!」

どういうわけか、非常に忙しい。席が満席なのはこの時間帯ならよくあることだ。だが、注文のペースがいつもより速い。注文を取ったかと思えば、他のテーブルの注文が飛んでくる。それを承ったら次はまた他のテーブルの注文が……といった風に休む暇がない。これでは冒険者の話を聞くところではない。店長であるミアは厨房にかかりつきりで、腕が四本にも六本にも見えるほど忙しく働いていた。

まさにネコの手でも借りたい状況。シルだけでなく、他の従業員も小さく悲鳴を上げている時だった。一人の少女が現れたのは。

「あの……宜しければ、少し手伝いましょうか？」

「いいんですか!？」

項垂れていた頭をガバツと上げる。目の前には自分と同じ年頃の少女がいた。緑を基調にした軽装、剣を携えているところを見るに彼女も冒険者か。耳はちよこんと尖っていて、エルフだと一目見て理解する。

どうやら「ファミリア」1団で来たらしく、後ろにも見目麗しい少女たちが並んでいた。どこかで見たことがあるのだろうか、高名な冒険者かもしれないと思ったが、パツと思いがたらない。

「……ええ、この時間は忙しいでしょうし」

「ありがとうございます！」

申し出が嬉しくて、思わず目の前にいた少女の手を両手で握る。手を握られたエルフの少女は驚いたように身体を震わせたが、直ぐに柔らかな笑みを浮かべて手を握り返した。そんな少女の様子に驚いたのは後ろに控えていた者たちだ。

「あら、リオンいいの？」

「はい、大丈夫です」

「リオンさん、と言うんですね！」

そうシルが問いかけると、少女は緩やかに首を振った。

「……はい、私の名前はリユー・リオン。ですが、貴女には是非ともリユーと呼んで欲しい」

敬語も不要です、とリユーが頬を緩ませる。シルもつられて笑った。

「私はシル、シル・フローヴァ。よろしくね、リユー！」

もう4年も前の話になる、少女たちの出会いだ。



その一件を境に、リユーとシルは交流を交わすようになった。マスクの裏にある素顔を見たときは、たいそう美人だと驚いたが——もともとエルフという種族は美形で知ら

れているので、当然といえば当然なのだが——一番の驚きはリユーがああ【疾風】だったということだ。

常に覆面<sup>マスク</sup>で顔を隠し、一般には本名すら知られていない【疾風】のリオン。そんな凄腕の冒険者がシルと同年代だと誰が予想できようか。シルはてつきり、孤高を求めている冒険者だとも思っていたので、シルの前で見せる人懐っこい笑顔を見て、頭の中にあった【疾風】像が音を立てて崩れていった。

この話を彼女と同じファミアの眷属に話すと、彼女たちは目を見開き、シルは特別なのだと笑って語ってくれた。

——ということをリユーに伝えてみれば、彼女は顔を赤くして。シルはますます嬉しくなった。

リユーたちは自分たちの本職<sup>ダンジョン攻略</sup>があるにも関わらず、定期的に店の手伝いを無償で行ってくれるようになった。他ならぬリユーが言い出したことだ。ミアとしてもタダ働きの人員が増えることはやぶさかではなく、二つ返事で了承した。

高名な美人冒険者が働いているということだけで店はますます繁盛し、結果的には対して忙しさは変わらなかったのだが、それはまあご愛嬌というものだろう。

——そして時はあつという間に流れる。



4年が経過した。強くて凛々しくて、それでいてどこか抜けている所もあった可愛らしいエルフの少女は、

「……ベル、美味しいですか？」

「はい、すごく美味しいです！」

(リユー……)

色ボケていた。あまりの変わりように2度見するレベルで。彼女の名誉のために、もう少しオブラートに包むならば、恋に落ちていた。

今もご飯を美味しそうに頬張る少年の手を握ろうかどうかで逡巡している少女は、どこからどう見ても恋真っ只中だ。ちなみに、彼女の料理はまだまだ店で出すには躊躇われるので、ミアが作った料理が出されている。

「あの、あのですね……」

「リユーさん？」

「い、いえ！ なんでもありません」

シルは少し前から変な相談をリユーから受けていた。あまり要領を得ない話だったので思うようにやればいいと言ったのだが、その結果がコレだと直感的に理解する。純粹そうな少年よりも顔を赤くしている初心なエルフがそこには居た。

少年の名前はベルと言うらしい。リユーとの会話に耳をそばだてていると、まだオラ

リオに來たばかりの新人らしい。ならば、リユーはこの一、二ヶ月の間に少年と出会って恋をしたことになる。

人を好きになるのに時間は関係ないと言うが、それにしても接点が少なすぎではないだろうか。片や田舎からでてきたばかりのルーキー。片や、オラリオでも名の知れた第一級冒険者。もしや一目惚れかと勘ぐったものの、リユーはそういう人<sup>エルフ</sup>だったかと自問自答する。少なくとも面食いなどではないはずだ。

(ダンジョンで出会ったのかな……?)

そうに違いないと結論付けた。命をかけたダンジョンではその人間の真価が問われる。きつとリユーのお眼鏡にこの少年はかなったのだ。

リユーが選んだ人ならばシルも文句はない。だが、だからといってすんなり認めるかと言え、そういうわけではない。親友として少年の性根を見定めねば。そう決心してシルは少年を目で追うようになった。



少年はよく『豊穡の女主人』を訪れた。一人で来ることは滅多になく、周りには彼の主神と一緒にダンジョンに挑んでいる仲間がいた。少年もその周りに居る者も、活発で

明るくて、善良な人間だ。——少年のそばにいた小人族バルウムの少女は少し事情が違ったが。少年に直接想いを訪ねたわけではないので——リユーが居るときは二人きりで会話をしているのかが知らないが、様子を見ている限りでは、それが恋慕かは置いておいて向こうも憎からず思っているだろう。

では、これで一安心か。そう思っていた矢先、シルはベルを目撃した。

——【剣姫】と仲良く手をつないで歩いている場面を！

「ベルさああん？ どういうことですかあ？」

「シ、シルさん……う？」

「リユーという人が居ながら何をしてるんですかあ？」

その日の夜、ベルを補足したシルはそのまま彼を店にまで連れ込んだ。

年上の女性に迫られてベルが思わず後ずさる。この時に催されていたイベントは【怪物祭】モンスターフェア。見世物としてはよくできていて、若い男女で見に行くとあればなかなか良い選択だといえる。現に、【怪物祭】モンスターフェアを見に行つたシルも、そういつた若いカップルを見て淡い憧れを抱いたりしたのでから。

しかし、それが親友の想い人と別の女性が歩いていけば話は別だ。リユーを袖にするなど許すまじ。場合によってはお話をする必要もある。鬼気迫った顔のシルに気圧されて、ベルが慌てて弁明しだす。

「ち、違うんです！ アイズさんとは……」

「アイズさん……？ 随分と仲がよろしいようで……」

ヒュ、とベルの息をのんだ声が聞こえた。ハーレムか、ハーレムでも作ろうというのか？

その後もベルがここにいるという情報を手にしたアイズとリユーが訪れるまで、ベルはたつぷりとシルに絞られるのであった。



それから二か月ほどが経過し、新たな催しがもう間もなく開催される頃になると、ベルと行動する人間が変わった。件の小人族バルウムの少女や赤髪ヒューマンの人間——名前はリリとヴェルフらしい——とは変わらず行動を共にするものの、リユーとアイズがベルのそばになくなったのだ。リユーは遠征に赴いているから当然とはいえ、アイズまでもが近づかないのはシルの目には不自然に映った。高度な恋愛頭脳戦は一般の人間には知られて

いないのだ。

その二人の代わりに行動を共にするようになったのは「ロキ・ファミリア」のLv6、<sup>ヴァナルガンド</sup>「凶狼」ベート・ローガだ。最近、アイズやリユーとそこそそしているのは見かけていたが、何の話をしているのか聞いても教えてくれなかったし、とてもじゃないが馬が合うとは思えなかった。

しかし、案外そうでもないようで、ベートはベルの兄貴分のような存在になりつつあった。今もこうして二人で食事に来る程度には仲がいい。史上最速でランクアップを果たした世界最速<sup>ルキ</sup>兎は、高レベル冒険者の琴線に触れる逸材らしい。

僅か一カ月で器を昇華させるという快挙に、同業者からの嫉妬ややつかみもあったものの、ベートの前ではそんなものは形無しだ。

「ベートさん、ベートさん！」

「ああ？ んだよ」

「僕、「ステイタス」が全部S以上になりました！」

「ハア!!」

ベートが口に含んでいた飲み物を思いつきりぶちまける。シルも慌てて周りを見渡した。幸いにもまだ時間は昼過ぎで、二人以外に客はいない。ベートも同じ考えだった

のか、あたりを確認したあと大きく息を吐いた。これが夜なら今頃とんでもない事態になっていたかもしれない。今のオラリオで、良くも悪くも一番注目を集めているのが自分だとベルは正確に理解できていないのだ。

ベートがすつと手を伸ばしたのを見て、ベルが顔を近づける。そのまま無骨な手で頭を撫でる——ようなことはなく、額にデコピンをお見舞いする。

「痛っ」

「テメエ、いつか痛い目見るぞ」

「？」

目を白黒させるベルに、ベートは大きなため息をついて席を立った。金を机に置いて店を出る。ベルも追従して出口に足を進める。

「それじゃあ、シルさんさよならー」

「はい、気を付けてくださいいね」

シルは二人を見送ったあと、闘技場コロシウムの方角へ視線を送る。少年はあそこで格上——Lv3の冒険者と戦うことになったらしい。シルも二人には何か因縁があることは前の事件で分かっている。

とはいえ、ベルは彼に勝てるのだろうか。リユーもアイズも自信満々に勝てると思っていたが、常識的な立場から言わせてもらえば勝ち目は限りなくゼロに近いように思え

た。

いくら少年が異常ともいえる速度で成長していても、レベルの差というのは絶対的だ。

「ベルさん……」

ふるふると首を振る。結局自分にできるのは信じることだけなのだ。もうすぐ遠征から帰ってくるリユート、当日は応援に行こう。何故かリユートは既に特等席を手に入れているらしい。勝てたらいっぱい褒めてあげて、負けても慰めたらいい。

——激突の日まで、あと七日。

# 貴様の名は。

『さあ、盛り上がってまいりましたー！ これより、第一回眷属闘争を開催します!!』

『俺がガネーシャだ!!』

「ガネーシャ・ファミリア」の団員と主神が祭りの始まりを告げると、オラリオが湧いた。闘技場の中だけでなく、街行く人々もそろって声を上げる。彼らの視線の先には宙に浮

かぶ不思議な鏡——神アルカナムの力によって作られた遠くを映す奇跡の産物。娯楽好きの神々

によりオラリオ中にばらまかれた、みんなでイベントを楽しむための必需品だ。

怪物 祭モンスターフリアで用いられたモンスターや、「ガネーシャ・ファミリア」の団員による前座も

終わり、いよいよ始まるのは誰もが待ち望んだ冒険者たちの健全な争いだ。酒に酔ったわけでもない、気に食わない冒険者を寄つてたかつて叩くわけでもない、殺し合いをするでもない。純粹な力比べ。遙か太古より、人間ヒトの本能に刻み込まれた血が滾る タイマン lv3 である。不参加を決め込んだ神も、下界の住民も目を向けさせられる強い引力がある。

『では、まず最初の対戦は——!? ……【モージ・ファミリア】のルヴィス vs 【マグニ・ファミリア】のドルトム！ お互い lv3 の高レベル冒険者、一体どんな戦いを見せて



くれるのか!? どう思いますか、ガネーシャ様!」

『俺が、ガネーシャだ!!』

『はいありがとうございます。では早速——選手入場!』

大きな音で食う方が空に打ち上げられると、出入り口から二人の選手が入場してくる。

一人は背中に弓を背負い、腰に剣を下げたエルフの青年——ルヴィス。もう一人は斧を手に持ったドワーフの青年——ドルトムだ。二人はお互いにならみ合っていて、すでに火花を散らしている。

『おおっと、どうしたのでしょうか? 『楽しく』を信条に行われるイベントですので、長きにわたる因縁とかはご遠慮いただきたいのですが!』

「分かっているな、ドルトム。敗者は大人しく引き下がるのだぞ。あいにくと私は、負け惜しみを言うドワーフなど見ていられん」

「それはこつちの台詞<sup>セリフ</sup>じゃ、ルヴィス。勝者が——エイナちゃんに先に告白する権利を手にする!」

「我らがエルフの女王陛下の名に誓って、負けるわけにはいかないッ!」

『思ったよりも浅い因縁でしたのでどうぞ思う存分戦っちゃってください!』

『俺がガネーシャだ!!』

『ガネーシヤ様うるさい！』

ギルドで働いている半妖精ハーフエルフの受付嬢が思わず顔を抑えたという。



休日の昼前から始まった催しはますます白熱していき一向に冷める気配を見せない。観客席には前もってチケットを入手していた手際のいい人間が席を確保しており、特等席で戦いを見守っていた。最前列にはオラリオ外からわざわざ視察に来た重鎮や、強豪ファミリアが列をなしている。勿論、「ロキ・ファミリア」と「アストレア・ファミリア」である。主催側としての権力を存分に使用したのであるであろうことは、見るものが見ればすぐに分かった。

「……まもなくベルの番ですね」

バンフレット配布表を手にとったりユーがポツリとつぶやく。激しい戦いを繰り広げてきた後のような傷と汚れを残したまま、食い入るように目の前の戦いを見つめる。

「ベルはとつても強くなったから、大丈夫です……」

「む……」

その横に座るアイズも小さく頷いて口を開く。彼女もまた戦闘を終えた後のような

格好で、ジャガ丸くんを片手に試合を観戦している。

「もう、リオンったら。何時までも拗ねてないの！ 私たちの出番は終わったんだから、あとはベルを応援してあげないと！」

「そうだぞ〜リオン。運がなかったと思って割り切るんだな」

「全くだ。こんな調子でベルの師が務まると思っっているのか」

そう次々に口をはさんでくるのは「アストレア・ファミリア」の団員だ。団長であるアリーゼもリユーたちと同じように体には戦いの跡が見て取れた。誰と戦ったのかは、まあ明白だろう。

「そういえば、ヴァナルガンダ「凶狼」はどこに？ 先ほどから姿が見えませんが」

分が悪いと判断したリユーが話を変える。

リユーたちが現在座っているのは選手が入場して来る扉の付近で、ほかの「ロキ・ファミリア」の団員や主催側の神々はその反対方向に座っていた。ベートも恋愛脳な女子に囲まれながら試合観戦などごめんだだったので、試合をする予定だったアイズたちとは別れ、試合までの間ベルを連れてロキやフィンと試合を見ていたはずだったが、どうにも姿が見えない。もうすぐベルの試合が始まるのに何をしているのか。そうリユーが不満げにつぶやくと、アリーゼが「あ！」と声を上げた。

「何か知っているのですか、アリーゼ」

「ええ！ そういえばベルと一緒にどこかに行くのを見たから、多分控え室にいるんじゃない？」

「なっ——」

絶句する。その手があつたか。横にいる少女との戦いやベルの戦闘に気を取られて、そこまで気が回らなかつた。アイズを見ても、彼女も小さく目を見開いている。試合前、一番緊張しているであろうベルのそばにいるという美味<sup>ビッグ</sup>い役があつたにもかかわらず、みすみすそれを逃してしまうとは。

『リユースさん……』

『どうしました？ ベル』

『……手を、少し握ってもらってもいいですか？』

『勿論、構いません』

ほわほわと頭の中でそんな妄想が出てくる。呆然としているアイズの頭の中も大体同じようなものだろう。この一カ月間、ほとんどベルと会うことができなかつたからこそ、ベル成分を補給しておく必要があつたのに。

なんて惜しいことをしたのだろう、と二人はそろって肩を落とした。



「——で、どうして貴様がここに居る？ 狂犬」

「テメエの面を拝んどこうかと思つてなア」

「ふ、二人とも落ち着いて……？」

一方、控え室では三人の男性が集まつていた。ここにも神アルカナムの力によつて作られた鏡が存在していて、壁の向こうで戦っている二人の冒険者を映していた。今から戦うわけもないのに、ベートとヒュアキントスの雰囲気は険悪で、なぜかベルが仲裁に入つていた。緊張している場合ではない。

「大体、どうして控え室が一つなのだ。反対側にもう一つ置いてあるだろう」

「あ、それは僕も思いました」

「ロキたちがわざわざ決めたんだよ。同じところから出てきた方が印象が良いんだとよ」

ヒュアキントスの問いにベートが答える。『楽しいイベントやから、一緒に入場した方が仲良しに見えるやろー？ いっそ手を繋ぎながら出てきてくれても良いねんで！』とは会議でロキが発した言だ。

モンスターリッパア

怪物 祭と同じく、一般人と冒険者の間にある溝を埋めることも目的に入っているため、その辺の細かいことは考えられているのだ。

「……くだらん、何にせよ、私は私の使命を果たすまで」

そう言つて、鏡に目を向ける。男が首元に剣を突き付けられていて、両手を上げた。降参の合図だ。試合終了の号砲が鳴らされ、大きな歓声上がる。次はいよいよ最後の試合、自分たちの番だ。

「おい、分かつてんだろうな」

席を立とうとしたヒュアキントスをベートが呼び止める。何が分かっていると聞きたいのか、主語のない質問だ。自分たちはそんなもので通じ合えるような仲ではない。しかし、この問いの真意ははつきりと理解できた。

「無論だ。——全力で行かせてもらう。二度目はない」

それだけ言い残して、ヒュアキントスは部屋を後にした。残されたのはベルとベートの二人。この一カ月行動を共にした即席の師弟だ。ベートの琥珀色の瞳がベルの深紅の瞳を鋭く射貫く。

「ベル」

「っはい！」

「俺が言ったこと、全部覚えてるな」

「はい！」

「ならいい。——行ってこい、存分に喰らいつけ」

ベートはそれ以上何も言わなかった。勝てども、頑張れとも言わずに観客席に向かつて歩き出した。ただ一言——喰らいつけと言った。ベルもベートも分かっている。いくらベルが成長しようとヒュアキントスは文字通りレベルが違う。格上相手に勝つことなど通常は不可能だ。負けても誰も責めはしないし、よくやったと健闘をたたえてくれるだろう。

しかし、ベルにとつてはもう二度目だ。Lv2にランクアップした時と何ら変わりはない。あの時も一人で格ミンタウロス上に立ち向かって勝利したのだ。『弱者』であるベルが『強者』の喉元を喰いちぎったのだ。ならば、今回もやれる。ベル・クラネルは恐れずに立ち向かうことができる。——前に進む。

『いよいよ最後の試合となりました！ この舞台に幕を引くのはこの二人だア——!!』  
すさまじい歓声とともに、二人が入場する。ヒュアキントスはもちろんのこと、ベルにも怖れはなかった。怒りも憎しみもなく、純粹な戦意がそこにはあった。

『なぜ大トリを飾るのが【疾風】では、【劍姫】では、【紅スカレット・ハートの正花】ではなかったのか。皆さんも疑問に思ったでしょう！ その理由がこれだ！ ファミリアの団長同士の戦

い！ 某神々によるとこの一戦のために今回の催しは開かれたという程！』

解説がどんどんヒートアップしていく。観客もつられて高揚していき、まさにクライマックスとしては最高の状況になっていた。

『相対するは「アポロン・ファミリア」団長——ヒュアキントス・クリオ！ そして、今や冒険者の間で知らぬ人はいない超新星！<sup>スーパーキー</sup>「ヘステイア・ファミリア」唯一の団員にして団長——ベル・クラネル！』

『特別ゲストを呼んできた俺が、ガネーシャだ!!』

『騒がしいぞガネーシャ、私はヒュアキントスの雄姿を見に来たのだ!』

『何を言ってるのさ! 勝つのはベル君だよ!』

ガネーシャに連れられ、アポロンとヘステイアが解説席に座る。散々『楽しく』と言ってきたにもかかわらず、目が本気<sup>ガチ</sup>になっている神を見て、すべての事情を把握している神々は笑い転げていた。

『既にご存知の方もいるでしょうが、ベル・クラネルのレベルが2であるのに対して、ヒュアキントス・クリオのレベルは3! 正直に言うとかかなり分の悪い戦いになると思われますが、どうでしょうガネーシャ様!』

『俺がガネーシャだ!!』

そんな外野には見向きもせず、ベルとヒュアキントスはお互いに闘技場<sup>コロシアム</sup>の中心に立



つ。外の音は完全に遮断され、燃えるような闘志が渦巻いている。

「——ベル・クラネル」

閉じていた瞳を先に開いたのはヒュアキントスだった。下を向いていた顔を上げると、そこには一人の冒険者が佇んでいた。

「まずは感謝と謝罪を。今のお前には私と戦わなければならない理由はなかっただろう。それを持っていたのは我々だけなのだから。だが、お前は今ここに立っている。感謝する」

「ヒュアキントスさん……？」

ヒュアキントスの言い分にベルが困惑の色を見せる。たまにベルの周りの人間は妙なことを言う。ベルには分からないのに、ほかの人には通じるような事を。アイズやリユーにベート、最近交流を持つようになったレフィーヤもそれに当てはまる。そして、今ベルの前に立つこの男も。自分<sup>ベル</sup>がどのような人物なのか、どれくらい強くなれるのか。彼らが自分に向ける視線は予想でも期待でもない。ただ当たり前のように、知っているかのように、ベル自身のことをベルより信頼しているのだ。

「私たちはまたこうして戦場に居る。手は抜かない、本気で今のお前を叩き潰す。我が名はヒュアキントス。賜った二つ名は『太陽の光寵童』<sup>ポエプス・アポロ</sup>。——貴様の名は」

彼もまた、ベルを知っている目をしている。ゾクゾクと体の感覚が研ぎ澄まされてい

く。油断も慢心もない『強者』に喰らいつくための準備が為されていく。もう、ベルの頭からは酒場で殴られたことなどなくなっていた。

「名前は、ベル。ベル・クラネル。神様から戴いた二つ名は——【韋駄天】」アキレウス

「——そうか。では【韋駄天】、勝負ッ……！」

それを契機に二人は同時に地を蹴った。



「これは……想像以上だ」

「そうやろく？ 流石の【勇者】アレイパーもこれにはビックリか」

「なんでロキが自慢してんだよ、他派閥じゃねえか」

「しかし、これ程とはな……」

「ああ、ベートが気にかけるのも領ける」

「うっせえぞジジイ」

フィンとリヴェリアがベルの戦闘を見て舌を巻き、ガレスはベルに目をかけたベート

の慧眼を評価する。ロキは自慢げにベルのエピソードを披露し始め、ベートが舌打ちする。

眼前では先程から激しい剣戟が繰り返され、観客も大歓声を上げながら勝負の行方を見守っている。

Lvが一つ違えば次元が違う。冒険者ならば誰もが知っている常識だ。Lv1の最上位とLv2の底辺でも、身体能力、反射神経、全てに差がつき、Lv2の者が勝利する。まして、Lv2になったばかりのベルとLv3になって久しいヒュアキントスでは勝負にならないと、知識がある者ほどそう判断した。

しかし、その予測は外れた。

「ハアッ!!」

「グッ!?!」

常に動き回っているベルをヒュアキントスが完全に捕捉しきれていない。与えられた二つ名に恥じない俊足を披露するベルは、ヒュアキントスの速さを追い越した。

最初こそ苦戦するヒュアキントスを嘲笑する声があったが、そんな声はもう無くなっていた。それ程までにヒュアキントスは優秀で、ベルは化け物じみていた。常人には見えない速度で戦場を飛び回り、魔法を駆使して動くその姿は、正しく古代の英雄のよう。いつの間にか闘技場の中は、二人の剣戟の音を除いて聞こえなくなっていた。

「ハアアツ!!」

とうとうベルをヒュアキントスが捉える。右手で剣を振り下ろし、ベルが防御したところを左手で振り抜いて吹き飛ばす。ベルはそのまま壁まで弾き飛ばされて、砂塵を巻き起こした。

「それで、ベート。彼は勝てそうなのかな？」

「知るかよ」

フィンがベートに問いかける。ベートはそれを一蹴した。前回勝てたのも相手の油断があつたから何とかなつた様なものなのだ。本気でやり合えば負けてもおかしくない——というより、負けるのが普通だ。

ただ、それを踏破することも可能かもしれないのがベル・クラネルという少年だけ。「どうせ長期戦になったらベルに勝ち目なんてねえんだ。——そろそろ動くぞ」

戦場を俯瞰するベートの目は正確だった。

砂煙から出てきたベルの瞳には覚悟が宿っている。



「……やはり、アポロン様は正しかった」

ベルの防具は既にボロボロだが、大きな怪我はしていない。先程隙をついて殴った時も、間一髪でベルの防御が間に合った。力はまだまだヒュアキントスの方が上。経験の差による技術も勝っている。しかし、前回と同じように速さで上を行かれた。単純な能力でも、今回の方が強いだろう。

ただ勝つだけで良いのならば、守りに徹していればいずれベルのスタミナが先に尽きる。だが、そんなものはヒュアキントスの求めた勝利ではない。たとえ、以前のように敗れるのだとしても、少年の全てを打倒しなければならぬ。

「そつちが来ないならば、こちらから行かせてもらう……い！」

Lv3の脚力を存分に発揮して、瞬時にベルの元に接近する。横薙ぎに振るう剣をベルが二振りのナイフで必死にいなす。見違えるような成長だ。ヒュアキントスがこの技術を身に付けるのにどれだけの月日を費やしたのか。驚きを通り越して笑いが出てくる始末だ。

ただ——だからと言って簡単にやられる訳にもいかない。

ヒュアキントスにはベルと違い莫大な戦闘経験に基づく『技と駆け引き』がある。モンスターではなく対人戦ということで勝手に違いがあろうとも、フェイントは有効だ。現に、剣を囿にフェイントを繰り返せばベルは翻弄され、本命の拳をくらっている。

「ガ、ハッ……い！」

今度こそベルの腹部を捉えた拳は重く響き、血反吐を吐かせる。それがかかるのもお構い無しに、再び吹き飛ばした。ベルの手から離れた黒いナイフが広間の中心に音を立って落ちる。

「ッハア……」

ヒュアキントスもベルの猛攻を受けた影響か、肩で大きく息をする。

まだベルは倒れていない。だから、視線は逸らさない。ここで『魔法』を使用して勝負を決めるべきか。二の轍を踏んでしまえばそれこそこの戦いの意味がなくなってしまう。

油断はしていなかった——だが、次の瞬間、ベルの行動にヒュアキントスは驚愕した。

「——はあああああッ!!」

「——なアッ!」

ベルが跳んできた。弾丸のように、雷霆のように。体感では今までの倍は速い。反応しきれなかったヒュアキントスはお返しとばかりにベルの攻撃で10M以上宙を舞った。

鮮烈な逆転に静まり返っていた闘技場が湧く。

——いよいよ戦いは最終局面を迎えようとしている。

『体に染み込ませろ。土壇場で出来るようになって初めて、それが技術って呼ばれるようになる』

訓練中、何度もベートに言われたことだ。ベルは片膝をつきながら、それを実感していた。

(……出来たッ！)

——【英雄願望<sup>アルゴノウト</sup>】というスキルがある。Lv2にランクアップした折に発現したベル・クラネル二つ目のスキルだ。効果は『能動的行動によるチャージ行使権』。要は、次に行う己の行動を強化できる。魔法を使おうとしたら魔法が素早く、力強くなり、相手を殴ろうとしたら拳は壁を割るほど強くなる。チャージの秒数によって効果は変わるが、一瞬のチャージでも絶大な効果を誇る、二つ目のレアスキルともいえる。

今行つたのは足を強化し、その勢いのまま再びナイフを強化して弾き飛ばす——つまり、連続行使<sup>セグエチャージ</sup>。前回のベルには使えなかつた繊細な制御<sup>コントロール</sup>を必要とする高等技術。ベートとの地獄の特訓を経て何とか数秒ならば使用出来るようになった努力の結晶。

(早く決着を着けないとッ……！)

スキルの代償として、体力と精神力マインドを削られる。これを使ったからには直ぐに決着を着けなければ、千載一遇の機会を失ってしまう。

「——ふッ!!」

二秒分のチャージ。再び弾丸となったベルがヒュアキントスに接近する。

「我が名は愛、光の寵児」——」

「——【ファイア・ボルト】！」

迎え撃とうとしたヒュアキントス目掛けて魔法を発射する。無詠唱という規格外の特性を持った魔法をかわす術はなく、直撃。

そして、勢いを殺すことなく懐にまで潜り込んだ。

「——ツッ!」

怒涛の連撃ラッシュ。息付く暇も与えない高速剣舞。魔法も封じられ、防御に専念するしかない。

それでも全ての攻撃を防げるはずはなく、だんだんと意識が薄れていく。

「——だ」——【リトル・ルーキー】。

ナイフが腕を裂く。

「——れだ」——【韋駄アキレウス天】。

魔法が腹を焼く。

「——お前は誰だ」——。



ナイフが頭を掠めて血が飛び散る。今までの情景が頭の中を駆け巡った。意識が覚醒する。

「そうだ、貴様の名前は——」

「ツッ・ベル・クラネル——！」

渾身の一撃を与えんとヒュアキントスが剣を振り下ろす。先程から手傷を与えてくるナイフを最初に弾く。そうすれば後は魔法に気をつければいい。

極限までお互いの体内時間が引き伸ばされる中、

「——」

（な——）

ベルが消えた。ナイフは宙に浮いている。注視していたナイフを思わず追ってしまふ。——その一瞬の隙がアダとなった。

「あああああッ!!」

「ガ、——ア」

一秒にも満たないチャージ。ヒュアキントスの視線が外れたその一瞬で、ベルは体も四足獣のように低くしてそこから顎に足蹴りを与えたのだ。

とうとうヒュアキントスが仰向けに倒れる。ベルも体力を使い果たし、蹲るような体勢になる。

「ハア、ハアッ……」

心臓の音が煩くて周りの音が聞こえない。試合は終わったのか、勝てたのか。

どれだけの時間が経ったのだろう。数秒か、数分か。これ以上一步も動けない、頼むから終わってくれ。懇願するように顔を上げる。

「ッ……！ そんな」

そこには雄おとこがいた。

「……勝負、あつたな」

ヒュアキントスが一步ずつ、ゆつくりと歩いてくる。ヒュアキントスの内から溢れてくる感情は何なのだろうか。怒り？ 喜び？ 分からない。

武器を匣はこにするとは考えたな。よくやった。もう動けないだろう。これで終わりだ。

言いたいことが色々出てくる。最後に一言言わねば気が済まない。最後までいいは、素直になっても良いだろう。そう思いながら、口を開く。

「——見事」

その言葉を発した途端、ヒュアキントスがベルに向かって倒れてくる。残った力を総

動員して何とか受け止めると、ヒュアキントスは目を閉じていた。

『な、何とということでしょう!? 【太陽の光寵童】、気絶しています！ つ、つまり勝者は——【韋駄天<sup>アキレウス</sup>】！ ベル・クラネルの勝利——！ 大番狂わせ達成です——！』

ベルvsヒュアキントス、ここに決着。——ベル・クラネルの勝利。

# 事の終わりと新たな始まり

「……んっ」

うつすらと光を感じて朝が来たのだと回らない思考で理解する。昨日の激戦のおかげか未だに気怠い体を起こすのは、なかなか骨が折れる作業だった。

(もう少しだけ……)

昨日は十分頑張ったのだ。格上<sup>Lv3</sup>——ヒュアキントスとの戦いに勝利したことを皆が称えてくれた。リユーやアイズ、ベートたち師匠はもちろん、主神<sup>ヘステイア</sup>にヴェルフやリリ、「ロキ・ファミアリア」、「アストレア・ファミアリア」の人たちにまで祝われた。

昨晩は関係者たちと館で一晩中騒ぎ立てて、おいしいお酒もおいしいご飯もたくさん食べて楽しい時間を過ごしたのだ。だから、もう少しだけこの余韻に浸ろうと目の前にある柔らかな感触に触れながら、再び意識を沈めようとして——

「——あ、れ？」

意識がまた浮上し始める。そういえば、ここはどこなのだろうか。昨日は確か「アポロン・ファミアリア」の館でパーティーを行った気がする。そのあと、自分はちゃんと何時もの本拠地<sup>ホーム</sup>に帰ったのか、その記憶がない。しかし、記憶がなくなるほど酒を飲んだ

覚えもない。確かに酒は飲んだが、【勇者】<sup>フレイバー</sup>フィン・ディムナや【九魔姫】<sup>ナインヘル</sup>リヴェリア・リロス・アールヴ、【重傑】<sup>エルガム</sup>ガレス・ランドロック等の大物もベルのもとにやって来たのだ。その衝撃ですっかり酔いなど醒めてしまったはず。だが、どうにも昨夜の出来事があやふやで、何かを忘れてしまっているようだった。

ひとまず、現状を確認しようと目を開けた。すると、

「……………」

目の前に金の髪を持った少女<sup>ヒューマン</sup>がいた。

(なんだ夢か……………って、え？ え？)

現実逃避をしようと閉じた目を再び開けると、やはりそこにはアイズ・ヴァレンシユタインの姿がある。すやすやと小さな寝息をたてながら眠りについてるアイズはダンジョン攻略をしている時とは打って変わって、どこか幼さを残していた。

ベルはよく仲間に察しが悪いといわれるが、身の危険には敏感だ。この状<sup>シチュエーション</sup>況はまずい。これは本拠地<sup>ホーム</sup>で朝を迎えたとき、たまに起こる『ヘスティア事件』によく似ている。ベルが一人で寝たはずなのになぜか布団に他の人間が紛れ込んでいるあの出来事に！

ベルは学習している。ギギギ、と鉛のように重くなった首を少し下に傾けると、そこ

には——ベルの手をつかんで離さないアイズの手と胸が——

時間が停止する。叫び声を上げなかったのは今までの訓練の賜物か。ゆっくりと手を引き抜こうとしても、がっちりガードされていて解けない。勢いよく抜こうものなら流石にアイズが起きてしまうだろう。しかし、それは良くない。こんなところを誰かに見られた日にはどうなることやら。

ヴェルフやベートなら、見て見ぬふりをしてくれるかもしれない。だが、リリやヘスティアに見られたら一日中絞られることは目に見えている。ロキなら……責任をとれとか言いそうだ。

そして、一番ヤバいのはもちろんリユーに見られることだ。淡い想いを抱いている人に軽蔑されたら泣いてしまう。

それだけはなんとしても避けねば。そうベルが決意を固めていると、後方から何者かに体を抱きしめられた。

「うわあっ!?!」

「……んっ」

思わず頓狂な声を上げる。不味い。見られたどころか後ろに誰かいる。ベルの声に反応したのかアイズがわずかに身をよじった。しかしまだ起きる様子のないアイズに

胸を撫で下ろしつつ、ベルは首を捻って後ろを確認する。

「……おはようございます、ベル」

果たして、そこには一人のエルフがいた。太陽の光を映して輝く金の髪に、うつすらと開けられた空色の瞳。顔がやや赤らんでいるのは現在の自分の行いを理解しているからか。身に纏っている服はいつも以上に薄手で、およそ男女が同じベッドに入っているときに着ているものではない。

まあ、つまり、この状況は初心なベルにとって、とんでもなく目の毒で。

「うわああああああ!?!」

今度こそベルは悲鳴を上げてベッドから飛び起きた。



「ええと、おはようございます。アイズさん、リユースさん」

今、ベルの前には神にも勝るとも劣らない美貌を持った女性が二人いる。両者ともにオラリオトツプクラスの有名な、高嶺の花だ。目を覚ますとそんな二人が何故か同じベッドにいたのだ。寝床についた時の記憶が全くない。まるで意識を飛ばしていたとしか思えぬほどに。

「その、どうして僕たちは三人で寝ていたんでしょうか……?」

おずおずとベルが話し始めると、アイズとリユーは顔を見合わせて——目配せした。何やら通じ合うものがあるらしい。

「……ベルと一緒に寝ようって言ったからだよ……?」

「……そうですね、確かに言っていました」

「なんで目をそらしながら言うんですか!? 絶対嘘ですよね!」

アイズは斜めを向き、リユーも同じくそっぽを向いて汗を流している。いくらベルでも容易くそれが嘘だと判断できた。嘘をつくことが苦手な三人が集まっても誰も騙せない。

「では、どうして私たちが……その、あの、ど、同衾しているのですか」

「うっ……」

痛いところを突かれて押し黙る。結局そこに行きつくのだ。ベル・クラネルという少年はどこまでも純粹でまっとうな倫理観を有している。ハーレムを作ったりなどありえない夢想をしているものの、交際もしていない女性と同じベッドに入るような教育はあまりされていない。

なので、ベルから一緒に寝ようと提案したとは思えないし、彼女たちから誘われても受け入れるとは考えにくい。



「ベル、思い出してください。貴方の思うようにすればいいのです」  
「そうだよ……。もうちよつと寝よう?」

ベルが必死になつて頭を回していると、左右から甘言が飛んでくる。耳元で囁かれる甘い声はベルの理性を揺さぶるには十分で。もしや本当に酒に吞まれていて自ら望んでこの状況に持ち込んだのではと今は亡き祖父の顔を思い浮かべた。しかし、すると、ノックもなしにドアが開かれた。

「今何時だと思つてんだ、さっさと起きろ」

「べ、ベートさん!」

灰色の尾を不機嫌そうに揺らして琥珀色の目を眇める青年は、中に誰がいようとお構いなしという風に部屋に入ってきて三人の顔を見た。リユーとアイズが抗議の視線を送るもベートはびくともしない。心臓に毛が生えているのはこちらも同じなのだ。

ズカズカとベートがベッドにいる三人のそばまで歩いてきて、ベルを二人から引き剥がす。そして、そのまま脇に抱え込んだ。

「行くぞ、ベル」

「待ちなさい。ベルをどこに連れていくつもりなのです」

「フィンが呼んでんだよ」

「フィンが……？　なら私も行く」

「お前は呼んでねえ」

いやいや、と首を振りながら寝起きのアイズはベートに抵抗する。まるで幼女に絡まれた時のような顔をしたベートは、そのままベルをアイズに押し付けて部屋から追い出した。こうすると少女を手懐けることができるかとベートは知っている。すさまじい速度で成長しているのはベルだけではない。ベートも学習している。

一人仲間外れにされたリユーは不満げに「むう」と声を漏らす。

「一体、何の話をするのでしょうか」

「女に首を絞められた時の脱出法とかじゃねえか」

「――！」

リユーの体が大きく揺れる。ベートを見上げるその顔は羞恥に染まっていて、果実のように赤くなっていた。

「……お酒の飲み比べは金輪際しません」

「アイズにも言っとけ。昨日テメエ等が暴れたせいで主役の意識が飛んだから」

「……すいません」

反省の意を示しているリユーを見て、ベートは大きく息を吐いた。二人分ほどのスペースを空けてベッドにベートも腰掛け、腕を組んで寝転がる。

相変わらず変な関係だと思ふ。家族ファミリアでもない、ライバルでもない、友人かと聞かれてもお互い首をかしげるだろう。未知の現象から始まった未知の関係。これが現象に全く関係のない一人の少年を中心に回っているのだから、なおさら奇妙だ。現在判明している五人の逆行者のうち四人はベルに深くかかわっていて、もう一人は今も彷徨い続けている同胞に首つたけ。以前よりは順調だとエルフの少女は言っていたので放置しておく。

イヴェイルス  
闇派閥との争いでも、「ロキ・ファミリア」に今のところ大きな被害は出ていない。神を相手取る以上、悟られてはならない。もう少しこちらの状況を理解してくれる味方が欲しいところだ、と横に視線を送りながら考える。

「そういえば、ベルから聞きました」

ベートが真面目に思考を巡らせていると、リユーがポツリと口を開いた。

「……何だよ」

「ベルは出会いを求めてオラリオに——冒険者の道に足を踏み入れたそうですが、彼の祖父の影響か『ハーレム』を作るといふ目標があつたとも言っていました」

「そんなの自分の勝手にすりゃあいだろうが」

現に複数人を娶つたという冒険者は数こそ多くないが、今もちゃんと実在する。もちろんそれを不誠実だと断じる者もいるが、他人の恋愛事情に興味のないベートからすれ

ば、同意さえあるならどうでもいいことだった。

「……私はあまり賛成の立場に居ませんが、彼に惹かれる者が多いことも事実です。『英雄色を好む』とも言いますし、正妻の私以外にも側室が数名いても問題ないと思います」

ベートは瞠目した。自分が選ばれると微塵も疑っていない態度。傲岸不遜な発言。まだ昨日の酒が残つてるのではと密かに祈った。明らかに良くないベクトルに進んでいる少女にベートは一言。

「馬鹿かよ」



夜。闇に包まれた街を魔石灯が煌々と照らす。広大な迷宮都市オラリオの一角は歓楽街としての役割を担っている。欲望が収まることなどない、夜の街。人々が歓楽に耽る娼館街の最も高い宮殿には神がいる。夜の王が存在した。

「……クソツたれ」

褐色の肌を隠そうともせず、煙管キセルを口にくわえた『美の女神』は吐き捨てるように眩

いた。開かれた窓から、オラリオの中心にそびえ立つ白亜の巨塔を睥睨。きつかけは何であつたのだろうか。神界でも遠く離れた場所に位置している二人には接点などなかつた。唯一あつたのは神として司るもの——『美』というモノだ。

片や歓楽街を支配する夜の王。片やこのオラリオを左右するほどの力を持った都市の王。気に食わないと感じるのは当然だつた。

「おい、ヘルメス。さっさと情報を吐きな」

そう言つて蠱惑的な笑みを浮かべる女神——イシユタルは部屋の隅でシクシクと涙をこぼしている男神——ヘルメスに目を向ける。ヘルメスの衣服は乱れ、体には謎の痣がいくつも付けられていた。その言葉を待っていたと、これ以上の責め苦は御免だと、男神は口を開く。最近もう一人の『美の女神』——フレイヤが気にかけているという少年の話。思想、戦績、性格、交友関係。幅広い情報網を持った神の口から様々な話もたらされる。つらつらと語られるその内容にイシユタルの顔色が変化していく。

「……つまりなんだい？ そのガキの交友関係は老神<sup>ゼウス</sup>か？」

「さあ、それはどうだろう。ただベル君は【ロキ・ファミリア】と深い関係にあつて【アストレア・ファミリア】とも深い関係にあつて、フレイヤ様にも気に入られていて、【ヘファイストス・ファミリア】とも交流を持っていて、今も【アポロン・ファミリア】の館で遊んでいる程度の少年だよ」

橙黄色の瞳を細めて軽薄な笑みを見せる。イシユタルとて無策ではなかった。協力者を募り、禁忌に手を出し、万全の状態でフレイヤを打ち砕く算段だった。

しかし、これはおかしい。少年の背後が強力すぎる。少年一人に手を出した時点でオラリオ全てを敵に回すようなものだ。いくら奥の手があるうとも、質と数で上をいかれては勝ち目はない。

本気でやるのか、と暗に問いかけられてイシユタルはヘルメスを睨め付けた。

「……………少し考える。クソツたれ」

## 提案

「はあ……」

ベルの口から小さく漏れたため息が空へと消えた。夜もあけたばかりのオラリオ。市壁の上で周りの景色を放心したように眺めている。この場所を知っている者は数えるほどで、ベルのお気に入りの場所になっていた。

彼の頭を悩ませているのは、先日打ち上げの後にフィン・ディムナから受けた提案だった。

その場で答えることができず、今に至る。

「僕たちの傘下に加わる気はないか」

そんな思いもよらない提案だった。



「えっと……傘下、ですか？」

朝早くにアイズと共に執務室に訪れたベルを迎えたのはロキとフィン、ガレスにリヴェリアだった。先に呼ばれて話を聞かされていたのか、何とも言えない表情を浮かべてソファーに座っているのはヘスティアだ。だいぶ頭を悩ませているようで小さく呻き声を漏らしながら体を左右に揺らしている。表情で言えば、ロキも似たような顔を浮かべている。

困惑した表情を浮かべたベルを見て、フィンが鷹揚とした態度で頷く。

「ああ、すまない。少しこれでは語弊があるね。——ベル・クラネル、引いては「ヘスティア・ファミリア」と同盟を組みたい」

「ど、同盟!?!」

思わずベルが声を出す。世界最速兎レコードホルダーとなつても構成員一人の弱小ファミリアとオリオの双壁と呼ばれる「ロキ・ファミリア」が同盟を組むとは一体どういう事なのか。

ベルの驚愕を他所に「ロキ・ファミリア」の幹部たちが話を続ける。

「君も神ヘスティアから言われた事はあるだろうが、基本的に他派閥の人間と個人的な交流を深めることは他の神や眷属から見ても良い印象を抱かれない」

「引き抜きを疑われる事もあるし、交流を持つ者が男女ならば深い仲になった時にファミリア間で問題が発生するからな。まして、派閥の力関係に大きく差があるところでは尚更それが顕著だ」



「火のないところに煙は立たない、と言うやつじゃ」

ファミリア内での結末は強まるけど、他派閥との交流が減るのは一長一短だけどね、とフィンが零す。フィンとしてはファミリア間の交流はあつた方が都合がいいのだが、周りはそうでも無いことが多い。

彼らの口から出た言葉はどれも正しかった。

「ヘステイア・ファミリア」の構成員はベル一人だから考えたこともなかったが、確かにダンジョンに潜る時にリリのようなサポーターを除けば、他派閥の人間を連れて行っている者を見たことが無い。「ヘファイストス・ファミリア」の眷属であるヴェルフと毎回ダンジョンに挑んでいるベルの方がおかしいのだ。

傍から見たらベルとヴェルフはお互いに改宗コンバートしないかと誘っているように見えたのだろうが、そんな疑問がベルの頭に浮かんだ。当然、良い反応をされるはずが無い。ある一点を除いて彼らの言うことは間違っていないからだ。

（神ヘステイアから言われたらどうでしょう……僕そんなこと神様から聞いたことないよ!?!）

そう、ベルはヘステイアからそのような話をされた事がなかったのだ。グルツと首を曲げてヘステイアの方に目を向けると、彼女も同じことを考えていたのか視線を逸らす。

「神様……」

「うっ……」

「どちび……」

「し、しようがないだろ！ ボクだってこんなことになるとは思わなかったんだ！」

ヘスティアの言うこんなこととは、ベルが冒険者になって一月足らずで高名な冒険者と交流を持ち、さらにその中の女性と深い仲になつても不思議ではないことである。それに関してはロキもフィンも同意だ。彼に一体何があつたのか。

それに、ヘスティアはファミリアを結成する前から「アストレア・ファミリア」と親しくしていた。「ヘファイストス・ファミリア」の館を追い出されたあと、バイトをしなればその日に食べるものもないほど困窮していた彼女を救つたのはアストレアの眷属だった。

あの一件を境にヘスティアはアストレアと仲良くするようになり、今でもベルと一緒にご飯にお呼ばれするのだ。そんな彼女が他派閥と深い関わりを持つことは駄目だ、とベルに言うことは出来ない。

話が逸れたね、とフィンが再び口を開く。

「という訳で、ベル・クラネル。君が【ロキ・ファミリア】の面々——というか、アイズとベートと毎日のように顔を合わせているのはあまり宜しくない。同じように【ヘファ

イストス・ファミリア」の鍛冶師と行動しているのもね」

改めて突きつけられた言葉にベルが硬直する。緊張した面持ちのベルを見て、リヴェリアも続ける。

「【ロキ・ファミリア】も【ヘファイストス・ファミリア】も巨大な派閥だから表立って非難してくる者は少ないと思うが、それでも噂は直ぐに広まっていくものだ。しかも、今回はそれが真実だから否定も出来ない」

「アイズたちがもう少し隠してくれたらよかったが、もう公然の秘密と言ったところまで来てしまったからのう」

ガレスが揶揄うようにアイズに言うのと、先程から我関せずとじゃが丸くんを食べていたアイズは不満そうに口を膨らませた。

「……私はちゃんとした。ベートさんが全然隠そうとしないから」

ベートがこの部屋にいたら「んなわけねエだろ!？」とキレそうだが、生憎とベートはダンジョンに向かってる。

ベルはアハハ、と苦笑いを浮かべて話を戻そうとする。

「それで同盟を組むっていうことですか」

「ああ、公然の秘密ならばいつそ公式に表明した方が今後の被害は少ない。それに、同盟を組むと言っても特段何かが変わるわけではないさ」

「そうなんですか?」

「要は君とアイズたちの関係に名前と理由が欲しいのさ。筋書きとしては……: そうだな、『犬猿の仲と言われていたロキと神ヘステイアだったが、神ヘステイアがファミリアを結成したことを心配したロキが僕達をけしかけて援助した』……: そんな所かな」

「フィン、だからそれやとウチが『ツンデレ』みたいやないか!」

「あれ、違つたかな?」

「違ううう!!」

フィンの作りあげた物語ストーリーに納得していないロキが詰めより、フィンの肩を勢いよく揺する。フィンを組み敷きそうな勢いのロキにリヴェリアは大きく嘆息し、ベルは目を白黒させた。

「それで、どうだ小僧。そちらも悪い話ではないだろう。ファミリアの力関係を見れば『ヘステイア・ファミリア』が傘下に加わったように取られるかもしれないが、契約上の上下関係は全く資金の援助も多少ならロキがやってくれるわ」

「なんだとう!?!」

ガレスの言にいち早く反応したのはヘステイアだった。勢い良くソファァーから飛び跳ねたのを見て、アイズが肩をびくりと動かしした。

「ヘステイア・ファミリア」は眷属の人数が少ない——というより一人しかない——た

め出費は安く済むが、同時に収入も少ない。

レベルこそもう皆から一目置かれる所まで来たが、それでもベルは冒険者として駆け出しも良いところ。他の同レベル冒険者が今までの経験から学んでいるダンジョンの効率の良い路や知識、クエストを発注する人とのコネクションなど足りない物は探せばいくらでも出てくる。

そして、それを「ロキ・ファミリア」ならば全て用意出来る。

今までの暮らしからランクアップしようと思つたら、彼らの提案はとても魅力的なものだった。ロキからの援助が借りを作るようでヘステイアには抵抗があつたが、乗らない理由がない。

満更ではない様子の子のヘステイアを見て、もう一押しだとフィンが内心ほくそ笑む。

「あと、ロキが神へファイストスと神ソーマの下に交渉しに行つてね、ヴェルフ・クロツゾとリルカ・アーデは改宗したいという意味があるならば構わないそうだ」

「本当ですか!？」

「勿論。こうすることで君たちを取り巻く状況は改善されて、僕たちもかなり動きやすくなる」

二人とも快諾してくれたわー、とロキがケラケラ笑う。ヘファイストスは子供の巣立ちを止めるものでは無いと考えていたし、ソーマはリルカという少女に興味を持って

いなかった。そのため、二つ返事で許可を取ってきたというわけだ。

「最後に決めるのはお前だ、【アキレウス章駄天】。この提案を受けるか退けるか」

団長としての責務を果たせ、とりヴェリアは言外に告げる。ベルも文句なんて全くない。諍いの種になりそうなものを取り除いてもらい、その上支援までして貰えるのだ。こちらがお願したい程の好条件だった。

そして、よろしくお願ひします、と頭を下げそうになった時、あることが気になった。「あ、あの！ 僕がこの提案を受けたら、アイズさんやベートさんとはこれまで通りにしていいんですか……？」

「……ああ、【ロキ・ファミア】の眷属とは今まで通りに接してもらって構わない」

ベルの言わんとすることを正確に理解したフィンが答える。すると、ベルは見る見るうちに暗い顔をするようになって、

「……ごめんなさい、少し考えさせてもらってもいいですか？」

そう言つて、ヘスティアと共に部屋を後にした。



そういう訳で今に至る。一晩中どうするべきか悩んだが、一向に答えは出ない。

フィンの提案を断る選択肢は無いと言つていい。しかし、だからといって受けたくない理由もある。一躍オラリオの有名人名となったベルもまだ少年。何かを切り捨てる判断が出来ずにいた。

そんな時、

「おはようございます、ベル」

背後から、聞き慣れた声が出た。

振り向くと、そこには金の髪を揺らしたエルフが微笑んでいる。

「リユーさん……おはようございます」

覇気のない声で挨拶に応じる。それだけでリユーはベルに何かがあったことを理解し、ベルの横に座った。肩と肩がくつきそうなほどの近距離でベルの言葉を待つ。いつもなら取り留めもない話をしているが、今回は違った。お互いに口を開くことなく眼下に広がるオラリオの街並みと抜ける様な蒼穹に目を向ける。

二人の間に流れる沈黙は苦ではなかった。心臓の音が聞こえるのではないか、そう心配する程の沈黙から数分、ベルがくしやりと破顔した。彼女の横にいただけで落ち着いてくる。この先何があってもあの日の憧憬が消えることは無いのだろう。あれは既に冒険者ベル・クラネルを構成するために必要な要素の一つに組み込まれている。そう考えると気持ちが軽くなった。

「……リユーさん、少し話を聞いてもらってもいいですか？」

「ええ、聞かせてください」

そうして、ベルは「ロキ・ファミア」からの提案を話した。ロキやフィンがベルとアイズたちのために行動してくれたことを。でも、このままじやリユーたちと一緒にいることが難しくなってしまうと。自分はどうしたらいいのか分からないと。

たどたどしい口取りで言葉を紡いでいくベルをリユーは静かに見守っていた。

全てを話しきったベルの頭をリユーはゆっくりと撫でる。

「それで、ベルはどうしたいのですか？」

「……どうするべきなのかは分かりませんが、僕は——」

——もつと、リユーさんたちと一緒にいたいです。

ベルの強欲ちいさなな願いは空へと消えた。それは、ささやかで、それでいて大層な願望だった。

その願いを聞き届けたリユーはベルの頭に手を回し、自分の胸元に抱き寄せる。ベルを褒めるように、勇気を貰うように。

「リ、リユーさん？」



「安心してください、ベル。私に考えがあります」

そう言ったと思えば、リユーは立ち上がり、外壁を昇るための階段へと目を向けた。

「アリーゼ、急用が来ました。少し付き合つて貰えますか」

「いいわよ！　ちやうど遠征に行く時にもう少し戦力が欲しかったの！」

盗み聞きをしていたことを特に悪びれる様子はなく、屈託のない笑みをアリーゼは浮かべる。

アリーゼがいた事に全く気づいていなかったベルは目を大きく開いて、秘密の場所を知る人が一人増えたな、と場違いな感想を抱いた。

「ベル！　安心してなさい！　私が「ロキ・ファミリア」にガツンと言つてきてあげる！」

行くわよりオン！　と元気よくアリーゼがリユーを引っ張つて立ち去つていく。そんな二人を見送つたあと、ベルも「ロキ・ファミリア」の本拠地ホトへ向かつて歩き出した。

その翌日、オラリオの新聞の一面に「ロキ・ファミリア」が同盟を組んだという情報  
が掲載された。未到達領域に挑む際の戦力や物資の補給を主とした同盟らしい。勿論、  
「ヘステイア・ファミリア」とも同盟を組んだという事も載っていたが、市民の注目を集  
めたのはそこでは無かった。

——「ロキ・ファミリア」、「アストレア・ファミリア」間での同盟結成

## 新たなる仲間

魔石灯のついていない部屋。太陽の光も入らない薄暗いところで、男は一人鎚を振るっていた。鎚にたたかれる鉄はリズムよく音を奏で、熱されて真つ赤に染まってその形を変える。鎚と鉄、彼らによってもたらされる物が今の男にとつての全てだった。

自らが作る装備に仲間の命がかかっている。鍛冶師はそれを理解しているからこそ、手に力が入る。最近行動を共にするようになった只人の少年の装備はもちろん、サポーターとして迷宮攻略の手伝いをしてくれる小人族バルウムの少女にもある程度装備は必要だろう。

自身の特異な能力と血筋からファミリア内でも少し浮いた存在だった男にできた大切な仲間。見事に全員異なるファミリアに所属しているが、もしも同じ眷属ファミリアだったなら、それはより愉快な日々を送れるのではないかとあり得ない話が頭に浮かんだ。

「…………おっと」

考え事をしていたためか雑念が入り、鎚が空を切る。鍛冶は何よりも集中力が物を言う。雑念は敵だ。再び気合いを入れ直すために一度外の空気を吸おうと立ち上がる。

「…………おおっ！」

しかし、長時間熱された空間で座っていた弊害か急に立ちくらみが起こり、その場でたたらを踏んで近くの壁にもたれかかった。ガシャン、と武器に触れたような音が――

「つて！ おいおいおい!？」

ぼんやりとしていた思考が急に冴えわたる。いくら『鍛冶』の技能アビリティがないレベル1の青年が作ったとはいえ、モンスターを屠る刃であることに変わりはない。青年は一般人より頑丈だが、刃物が体に刺さっても平気なほど人間を辞めていない。

何とか迫りくる数々の武器を避けようと後ろに飛びのいて――そのまま盛大にこけた。足元に転がっていた紙の凶面に足を滑らせて頭から。それはもう盛大にこけた。青年のファミリアの団長や主神が見ていたのならば大いに笑われただろう。

壁に掛けてあった武器が軒並み地面に音を立てて落ちる。青年はなんとかそれを回避したが、とどめと言わんばかりに台に乗っていた鎚が頭に向かって落ちた。

散々な目にあつて青年は眉をしかめた。どうにもツイてない。『幸運』のアビリティを持つ少年と違つて『不運』というレアアビリティが発現したのではないか。そんなことを考えて立ち上がろうとしたとき、不意に思った。――思い出した。

「……何やってるんだ、俺」

鍛冶師の青年——ヴェルフ・クロツゾは呆然としたように、しばらく倒れこんだままだった。



「はい、確かに確認しました。今日もお疲れ様です」

そう言つて半妖精ハーフエルフの少女は笑みを浮かべて頭を下げた。ギルドの受付嬢である少女たちの存在はそのままギルドの印象に直結する。そのため、受付嬢は笑顔を作りながら冒険者に対応する。美人に微笑まれて悪い気になる男はいない。彼女たちに良いところを見せようとしてダンジョンを攻略し、魔石を収集する。魔石産業で成り立っている迷宮都市オラリオには彼女たちの存在が不可欠なのである。

日もそろそろ沈み、ギルドに押し寄せていた冒険者の波が無くなってきて、少女は小さく息を吐いた。

「疲れた〜！」

助けて、と少女の友人が情けない声を漏らす。冒険者が少なくなつたからと言つて仕事が終わるわけではない。受付嬢の仕事は多岐にわたる。迷宮ダンジョンの情報を冒険者に伝えたり、新人相手ならば彼らが死なないように最低限の知識を教え込んだり、昇格ランクアップした

冒険者の情報を神会デナトウスに届けるために書類を作成したりと。

今日も当然、まだやるべき仕事が残っている。よって、友人の助けを呼ぶ声は無視スルーし、書類仕事にとりかかろうとする。

(……そういえば、ギルドに来なかつたな)

ペンを持つ手が少し止まる。今日は少女が担当していた少年が朝に見たきり、ギルドに来ていないことを。

彼の主神は神格者のため、もしも少年がダンジョンからまだ帰っていないようなことがあれば、すぐさまギルドに報告してくるはずなので、今日も無事に帰ってきてギルドに来ていないだけだとは思うが、それでも心配なのだ。

必ずしもダンジョン攻略の帰りにギルドを訪れる必要はないといっても、顔を見ないと安心できないという面もある。

(なるべく帰ってきたらギルドに来てって言うてるのに……)

少女が不満そうに眉を顰める。

不思議な少年だ、と思う。冒険者になりたいと屈託のない笑みを浮かべていた彼はとてもじゃないが適性があるとは思えず、目を離れたらすぐに死んでしまうのではないかと思うほど、荒くれもののイメージが定着している冒険者像とは真反対の純粋な少年だった。

冒険者では無いエイナが守ってあげたいと思うような年下の彼は、あつという間に長い歴史を誇るオラリオで頭角を現し、最速でのランクアップを2度も果たした。

【ロキ・ファミリア】の【剣姫】——アイズ・ヴァレンシュタインを遥かに凌ぐスピードに、オラリオ中の神々と冒険者が彼に注目した。一度目は『ミノタウロス』を打倒して、二度目は格上<sup>Lv3</sup>を打倒して。最近では派閥間の同盟を結んだらしい。嬉しそうに少年が報告してきたのを覚えている。

類まれなる才能を有した少年は第一級冒険者たちとも縁を結び、どこか遠い存在になりつつあった。そして、少女はそれが少しだけ嫌だった。目をかけていた少年に自分ももう必要な存在になってしまったような気がして。強くなることは良いことだが、手が届かなくなるのは寂しいものだ。

「はあ……」

ため息をついたあと、首を振ってネガティブな思考を振り払う。この鬱屈とした気分は、明日にでも少年に会って解消することにしようと再び書類に目を向ける。

手元にあるのは、丁度数日前にランクアップを果たした件の少年の物だった。<sup>ゼ</sup>Lv2昇格時は神会<sup>デイトゥス</sup>直前にランクアップしたため満足に書類も作成出来なかったが、今回はまだ次までに時間があるので、作成に取り掛かっている。

書類に書かれているのは冒険者の基本的な情報だ。年齢、性別、容姿、戦闘<sup>スタイル</sup>方法、交

友関係など神々が二つ名を付けるに当たって必要な情報が取り揃えられている。

少年の場合は、一度ランクアップしているのも特に珍しいことではない。二つ名が変更されるのも特に珍しいことではない。

受付嬢は複雑な面持ちで少年の『二つ名』の場所をなぞった。

「アキレス韋駄天」……か」

もつと無難な二つ名の方が彼らしいのにな、と頬を緩ませる。そう、例えば——「リトル・ルーキー」とか。

「……っ！」

「ちよっ！——大丈夫!?!」

突如頭痛に襲われて、手に取っていた書類が音を立てて地面に落ちる。

頭を抱え込んだ少女を見て、友人が駆け寄ってくる。

少女は割れるように痛む頭を押さえながら、書類に描かれた白髪の少年の似顔絵を見つめる。

「……ベル君?」

半妖精ハーフエルフの受付嬢——エイナ・チュールは有り得たかもしれない今を見た。



(……おいおい、どうなってんだこりゃ)

妙な事になったと確信したヴェルフは身一つで鍛冶場を飛び出し、ギルドに向かっていた。最初は「ヘステイア・ファミリア」の本拠地へと向かったものの人がおらず、他の心当たりがある場所を手当り次第に探る。

今、ヴェルフには二つの記憶がある。生を受けてから17年間の記憶と、先ほど思い出した今より少し未来まで生きたヴェルフ・クロツゾの記憶。メインとなっているのは未来のヴェルフ——別世界と言った方が正しいのかもしれない——の記憶だが、過去を振り返ろうとすると、実感を持ってもう一人の記憶も思い出せる。

この二つ記憶でこれほどまでに差異がある原因があるはずだと、ヴェルフはそう考えた。

自分のファミリアでは大した変化はなかったが、他のファミリア——特にベルの周りには全くの別物になっている。

記憶の中のベルに不審な点はなかった。まず間違いなくベルはヴェルフのように未来の知識を有しているわけではない。同類なにかまなのはやはり、「ロキ・ファミリア」と「アストレア・ファミリア」の団員。特に「剣姫」と「凶狼」ヴァナルガード、そして「疾風」。

団長や神々が裏で手を回して関係性を前回と変更させた可能性もないわけではない



が、おそらく彼らだろうと当たりを付けた。

前回の「アストレア・ファミリア」のことをヴェルフは何も知らないので、話を通しに行くのならば「ロキ・ファミリア」の方が何かと都合がいい。しかし、未来のことを知っている、などと言つても本拠地ホーラムの前で門前払いされるのが目に見えている。椿にも頭の心配をされることは想像に難くない。

故に、幹部級の眷属と直接話がしたいならば、椿か主神ヘファイストスを連れていくしかない。生憎と椿は一人で武器の試し切りをしにダンジョンの深くまで潜っているので、その手は使えない。

ならばどうするか。

「ベルの奴何処に行つてんだ？」

——ベルを見つければいいのだ。

ベルあるところに師匠ありと言われるほど、ベルと彼女たちは行動を共にしている。ダンジョンにこそレベルの差やファミリアの違いについてこないが、外に出たら市場にも飲食店にも大体いる。

つまり、ベルと一緒に居ればほぼ確実に彼女たちと直接会話をする機会が生まれるのだ。

時刻はもうしばらくで夜のとほりも落ちるころ。冒険者はダンジョンから帰還し始

める。ベルが本拠地に居なかったならば、残りはギルドか『豊穡の女主人』。そう思ってギルドに顔を出すと、

「あの、すいません。今日はエイナさんもう帰っちゃいました？」

「あ、弟君じゃん！ エイナはね、ちよつと疲れがたまつてたみたいで奥で休んでるの」「そうなんですか……」

「じゃあまた明日行くことにしなよベル君。早くいかないと間に合わないぜ」

居た。ハスティアも一緒だ。ヴェルフの担当であるミィシヤと会話している。

ベルたちには何やら用事があるようで、ギルドを去りそうな二人を慌てて止めにかか

る。  
「おーい！ ベル、ちよつと待った！」

「ヴェルフ!? どうしたの？」

「ちよつとベルに聞きたいことがあつてだな……。今からどつか行くのか？」

「うん！ アストレア様にご飯を食べようつて誘われて」

そつちか、と内心歯噛みする。ロキ・ファミリアなら一緒に連れて行つてもらいたいくらいだが、彼女たちとヴェルフ自体は対して仲がいいわけではない。向こうはベルの友人として接してくるし、こちらもベルの友人として接するが、所謂、友達の友達のよ

うな関係で、ホームにまで乗り込むのはややハードルが高い。別にロキ・ファミリアに

友人がいるのかと聞かれたら、否と答えるが、男女比の問題である。ベル・クラネルハイレム希望者ではないヴェルフには些か荷が重い。

そのまま何気ない会話を繰り返すのが、やはりベルに記憶がある様子ではなかった。隣へのステイアやミイシャにも、所々で前回の記憶があれば反応しそうな言葉フレックスを使用したものの特に反応はない。

へステイアがそわそわしてきたので、人探しは明日以降にしようとしてベルと別れようとする。

「ベル君!？」

ひと際大きな声がギルドに響いた。

そちらに振り向くとエイナが肩で息をして立っていた。

「エイナ、もう大丈夫なの?」

「べ、ベル君! 覚えてないの!？」 ウォーゲーム 戦争遊戯とか緊急任務のこととか!」

「エ、エイナさん……? なんのことですか?」

ミイシャが声をかけたのにも気づかず、エイナはベルに詰め寄る。詰め寄られたベルは目を白黒させて、エイナに問い返した。望んだ答えが返ってこなかったエイナは表情を暗くする。

周りの注目を集めていたため、ベルとエイナの様子を見てギルドに残っていた面々は何事だどざわめきだしたが、ヴェルフはこの彼女の慌てように一つの解を導けた。戦争遊戯、緊急任務。いずれも覚えがある。ヴェルフ・クロツゾがベル・クラネルと共に潜り抜けたものだ。そして、これを今知っているのは——

「なあ、【リトル・ルーキー】って冒険者に覚えはないか？」

「——！」

——ヴェルフと同じ、時を遡った者のみである。

驚愕の色に染まった翠玉エメラルドの瞳が大きく開かれる。

ようやく一人見つけたと、ヴェルフはにやりと笑った。